

九州大学社会包摂デザイン・イニシアティブ
2023年度活動報告書

社会包摂と デザイン

— 問いの立て方、答え方 —

D I D I
Design Initiative for
Diversity & Inclusion
2023

社会包摂とデザイン – 問いの立て方、答え方 –

目次

- 1 ごあいさつ
- 2 社会包摂デザイン・イニシアティブ (DIDI) について

3 デザインシンクタンク/タスクフォース

- 4 社会包摂デザイン・イニシアティブシンポジウム
- 6 「行政の現場における社会包摂デザイン」の調査・研究
- 8 社会包摂デザイン勉強会
- 10 自治体との連携
- 11 第1～3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」総括
- 12 社会包摂デザイングレートボックス、スキット、シビックデザインワークショップ
- 13 リーガル・デザイン・ディクショナリー、社会包摂年表、社会包摂インデックス
- 14 DIDIタスクフォース 学内における子育て支援の実態に関する調査
- 15 オンライン海外調査 包摂型社会に向けた未来の協働と自治の可能性
- 16 社会包摂デザイン研究会 第5回「デモクラシー」

17 ソーシャルアートラボ/シビックデザインラボ

- 18 **Project 1** 障害を有する人との映画制作
- 19 **Project 2** 未来の児童養護施設のデザイン
- 20 **Project 3** 認知症ケアの場における芸術活動
- 21 **Project 4** 自然の循環と協働体の再生のためのアート実践の仕組み – 物語からのアプローチ
- 22 **Project 5** 「半農半アート」を基盤とした地域づくりの仕組み
- 23 **Project 6** 救急のしくみのデザイン
- 24 **Project 7** イミグレーション・デザイン
- 25 **Project 8** 多様性に応えるピクトグラムのデザイン
- 26 **Project 9** ジェンダー/LGBTsのデザイン

27 教育

- 28 [授業] 社会包摂とデザインA
- 29 [授業] 社会包摂とデザインB
- 30 [授業] 身体表現特講演習 文化事業マネジメント特講
- 31 [授業] スタジオプロジェクト (聴覚障害のある人にとってのコンサートのあり方を考える)
[授業] コース融合プロジェクトA・B (聴覚障害のある人にとっての「音楽」を考える)
- 32 [授業] 創造農村デザイン演習 創造農村デザイン応用演習
- 33 [授業] デザイン・シビック
- 34 [授業] 福祉人間工学
[高校生対象] 高校生とのジェンダー研究

- 35 社会包摂デザインを考えるための道具

- 36 [コラム] これからの社会包摂を進める (かもしれない) 個人の力
- 37 [コラム] 多様な生物が関わり合う田畑を想像しながら
- 38 2023年～2024年 メディア掲載・情報発信
- 40 総括 社会包摂デザインとユニバーサルデザイン

ごあいさつ

尾方 義人 (センター長・DIDI 教員)

「興味があるからやるというよりは、やるから興味ができる場合がどうも多いようである。」(寺田寅彦『写生紀行』より)

前研究院長の谷正和先生、現研究院長の尾本章先生から引き継いだこの「社会包摂デザイン・イニシアティブ (Design Initiative for Diversity & Inclusion : 以下 DIDI)」は、当初計画の3年を終えました。

九州大学は2021年に指定国立大学になりました。その少し前、同年にDIDIは設置されました。幸い、芸術工学部のセンターとしてかなり自由に活動できました。

またこの期間は芸術工学部の改組の時期でした。様々な方法を集め新しい複雑な問題に対応していくという考え方は、新しい芸術工学部や未来構想の考え方にも通じます。芸術工学部設立当初の4学科は対象と方法が明確でした。時代が進み、現代的な問題が様々な生まれました。それらの解決には一つの方法では対応できず、また建築や自動車や情報や音のように対象自体をデザインできるものではなく、環境や貧困やジェンダーや労働などそれ自体をデザインし直せるものでもありません。そのため、社会そのものや仕組みや考え方をデザインし直すスタンスで設計を試みるのがDIDIだと思っています。

もともと芸術工学で規定されたデザイナーは、“一定の計画に基づいて、相異なるいくつかの要求を調整しつつ全体を総合・組織する作業にあり、これに生理、心理、芸術、経済など人間・社会的要求を加え、調整総合する設計家”と1966年に定義されたようです。この年は私が生まれた年です。

そして、多数のプロジェクトを通し、私が理解したソーシャルアートラボは、「芸術の非専門家も含め多様な感性による表現を通し、表現の日常性を理解、一般化するところ」でした。それは新しい関係を築くことによって、違いを共有し、新しい場所を創造しようとする行為だと思います。

シビックデザインラボは、過去の機能主義、合理主義、マーケットに囚われ、作家性が強く外在化していなかったデザインの思考法や設計法を溶解させようとしたのだと思います。それは非営利への対応やデザインの方法を公共化しようとし、包摂的アプローチのために多様なものの見方を得ようと活動してきました。

デザインシンクタンクは、それらを客観的に見ながら、

情報の蓄積やデザインツールの構築を行ってきました。

私は芸術社会学や障害学・ジェンダー学など何も知らない一介のデザイナーです。それでも自ら動機づけをして、やっているうちに興味が出て、様々なプロジェクトを勉強させていただく中で、興味を持ってくれた学生さんたちにも助けられました。

「表面を作る者を世人は偽善者という。偽善者でも何でもよい。表面を作るという事は内部を改良する一種の方法である。」(夏目漱石『文学評論』より)

芸術工学は造形的審美性に依ったパウハウスの教育を批評しながらも、“知的にも情的にも、講義ばかりでなく行動を通じて、書物ばかりでなく作業を通じて、経験を通じて知識を習得しなければならない。芸術による教育、行動を通ずる教育”と再評価しています。社会包摂デザインとしての先生方の研究プロジェクトや教育は、書物と経験を通じた、より社会的なものです。私は先述の通り一介のデザイナーで、マネジメントもまったくできませんが、デザイナーの思考法や方法論で、私なりの社会包摂デザインをどう伝えるか考えてきました。

3年間の報告書のサブタイトルは、1年目は「何をみるか、どこからみるか」として、問題に対しての視座と視点のつくり方を考えました。2年目は「線のひき方、なおし方」として、科学的要素還元による分節とその弊害、また、間違っても修正する姿勢を謳いました。3年目は「問いの立て方、答え方」です。問いと答えには以下のものがあると考えています。

“プロブレム・ソリューション型：課題を見つけ解決案をつくる”“クエスチョン・アンサー型：質問に対して、答える”“イシュー・リプライ型：問いかけ・課題に対して、応答し続ける (考え続ける)”

どのように問いを立て、尋ねていくか、それによりどんな答えをつくり出せるか。問いと答えのデザインが社会のつくり方に関わってきます。桜前師走 (川崎和男『デザイナーは喧嘩師であれ 四句分別デザイン特論 (知的喧嘩の基本的思考)』) の真っ只中、「社会包摂」という僥倖にめぐり合ったことを噛み締めながら、作った3冊目の報告書です。拙い2年半の任期を振り返りながら、誰もが安心できる次のセンター長の中村美亜先生にお渡ししたいと思います。

社会包摂デザイン・イニシアティブ(DIDI)について

(1) 私たちが取り組む課題

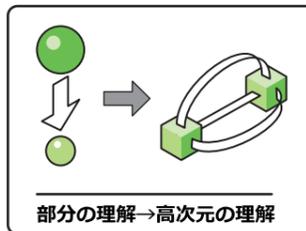
資本主義に基づく過度な自由競争や新型コロナウイルスを背景に、格差や貧困、社会的分断と非寛容による差別が拡大しつつある現在、認知症ケアや障害者支援をはじめ、障害、性、国籍、貧困などの理由で疎外されてきた人々を含む、あらゆる人々の生を尊重する社会の実現が喫緊の課題となっています。社会包摂デザイン・イニシアティブ(DIDI)では、こうした課題に対して、分野の垣根を越えた多角的なアプローチから、従来とは異なる仕方で、〈もの〉〈こと〉〈サービス〉〈社会制度〉をデザインすることで、誰もが潜在能力を発揮し、健全な成長や豊かさをめぐる新たな価値を生み出す仕組みを実装しています。

(2) 社会包摂デザインのポイント

社会包摂デザインにおいて重要な概念が「多様性」と「包摂性」です。DIDIでは一見すると矛盾するこれらの概念を、両立することを目指します。特に、デザインが生み出されるプロセスにおいて、どのような「価値観」のもと、どのように「事実」が捉えられ、どのように「評価」が行われるかを検証し、関係の再構築と価値の変容を促す仕組みを提案していきます。

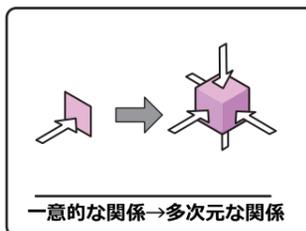
関係の再構築

人を一面的に捉え、人どうしの固定的な関係を生み出すのではなく、多面的な関係を促すデザインを通じて、関係性の再構築を目指します。

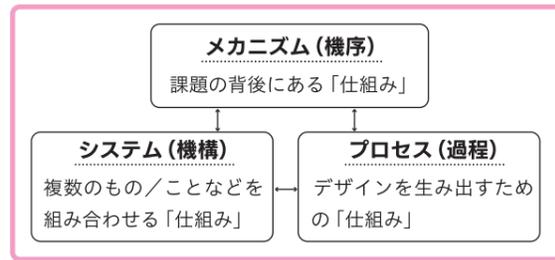


価値の変容

一面的な価値の捉え方を再生産するのではなく、多角的なアプローチや価値観に基づくデザインを目指します。



その際に着目するのが3つの「仕組み」です。



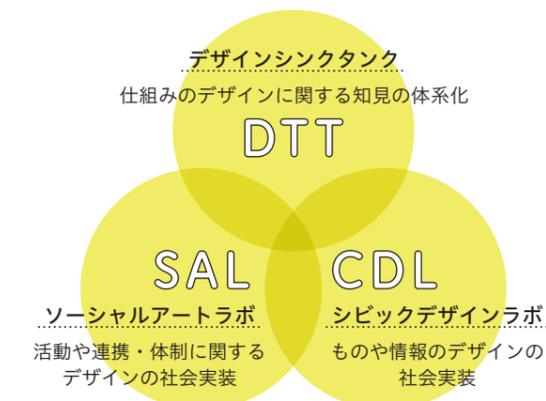
(3) 組織構成と戦略的課題

DIDIでは5つの戦略的課題を掲げ、学内外の様々なアクターと協働しながら包摂型社会の実現を目指しています。そして、これらの課題を3つのラボで共有し、複数のプロジェクトを展開することで、多元的なアプローチを提案しています。

戦略的課題(令和3~5年度)

課題解決法の刷新	社会包摂を実現するためのデザインを開発、社会実装します。
シンクタンク機能の強化	学内や学外(行政・NPO)の現場の声を聞いて情報を集め、整理します。
法務戦略	新しい「仕組み」のデザインを提案するために、法律や条例などの課題を専門家と検討します。
国内外の調査	国内外の社会包摂デザインの事例を調査・分析し、新たな知見を生み出します。
教育との連携	学部・大学院での教育を通じて、社会包摂デザインの視点を持つ人材を育成します。

↑ 組織構成



デザインシンクタンク/タスクフォース

Design Think Tank - Task Force

社会包摂デザイン・イニシアティブシンポジウム

「行政の現場における社会包摂デザイン」の調査・研究
デザインシンクタンク研究会
NPO法人ドネルモによる行政調査・小冊子制作

社会包摂デザイン勉強会

世界水泳2023福岡大会のピクトグラム・屋外誘導サイン制作
九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター
イミグレーション・デザイン

自治体との連携

第25回のおがた男女共同参画フォーラム
男女共同参画ぶちフェスタ
第3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」公開二次審査
九州大学公開講座「表現と対話から考えるためのデザイン」

第1~3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」総括

社会包摂デザイングレートブックス、スキット、シビックデザインワークショップ

リーガル・デザイン・ディクショナリー、社会包摂年表、社会包摂インデックス

DIDIタスクフォース 学内における子育て支援の実態に関する調査

オンライン海外調査 包摂型社会に向けた未来の協働と自治の可能性

社会包摂デザイン研究会 第5回「デモクラシー」

社会包摂デザイン・イニシアティブシンポジウム 「多様性を解き放つため——社会包摂デザイン3年目の 問いかけ」

2024年2月28日(水)

本シンポジウムは、DIDIが展開してきた「社会包摂デザイン」の実践の3年を振り返ると同時に、何のために多様性が求められているのか、どのように多様性のある組織を生み出すのかを考えるために企画しました。文化人類学的な観点から多様性を追求されてきた波平恵美子先生、東京大学でジェンダー・ダイバーシティ政策を先導してきたメディア研究者の林香里先生をゲストにお招きし、基調講演をしていただきました。

両名の講演において共通する指摘が、文化の多様性が人類の長い歴史における生存戦略の帰結であり、実りある社会の実現には多様なアクターを含む意思決定の担い手の在り方を問い直す必要性がある

という点でした。後半のパネルディスカッションでは、DIDIの構成教員を交えて、人間はそもそも相互依存的で脆いものであり、自分自身を保つためには多様性が欠かせないという問題提起を踏まえて、議論を深めていきました。それによって、「主体性を誘発する関係性」がどのように生じるのかという、多様性を解き放つデザインにおける核心的な論点が浮上しました。



パネルディスカッションの様子

[ゲスト講演]

多様性対応のための論理への模索——家族、社会、生命

波平先生は、文化人類学における多様性と普遍性の追求を切り口に、現在の文化の多様性は多様な環境に対応するための生存戦略の結果であることを説明しました。文化は集団的なアイデンティティ形成を担うものであるが



ために、文化間の交流により変容することを認めない動きが生じ、特にアイデンティティの揺らぎを経験するときに、文化の虚構のイメージが形成されるのだと言います。しかしながら、危機にさらされるときこそ、共感を基本的要素とする「レジリエンス」が求められ、その主体は何か、客体は何かを見定め、多様な時間軸を想定する必要があると生じることとなると話しました。

ゲスト講師

波平 恵美子 なみひら えみこ
お茶の水女子大学名誉教授。専門は文化人類学。PhD(テキサス大学)。九州大学教育学部助手、佐賀大学教養部助教授、九州芸術工科大学芸術工学部教授、お茶の水女子大学文教育学部教授を歴任。主な著書に『ケガレの構造』(1984年)、『からだの文化人類学』(2005年)など。西日本新聞で連載随筆「パズルみたいな文化人類学」を全50回にわたって連載。

[ゲスト講演]

倫理としての多様性／価値としての多様性：メディア研究から考える

林先生は、メディア研究の観点为例にとりながら、組織における多様性の乏しさがなぜ問題なのかを説明しました。均質的な報道機関では、半世紀以上もの間、伝統が見直さ

れることなく受け継がれ、社会問題をめぐる集合知を發揮することもできていないと指摘。また、重要なのは「レリパンス」(関係性)であり、個人を軸として他者から距離を

置き自律するのではなく、人と関わりを持ち、相互に依存する方が自然だという考え方から、近代の自由主義的な規



[パネルディスカッション]

多様性を解き放つためのデザイン

最初に座長の谷先生が尋ねたのは「何のための多様性なのか?」という問いでした。これに対し、波平先生は生存のために多様性が求められ、自分自身が絶えず変わりゆくことで環境に適応していると答え、林先生はアイデアの多様性が担保されることで、より知が研ぎ澄まされていくのではないかと答えました。中村先生も、世の中が危機に陥るときこそ、社会規範にとられない「聖なる愚か者」が突破口になるのではないかと持論を述べました。また、工藤先生が「障害の社会モデル」を参照して述べるように、マジョリティ/マイノリティ間の「権力」や「特権」の不均衡な配分、なぜこのようなことが社会で起こるのかという発生メカニズムを考える必要が生じると言えるでしょう。まさしく、レジリエンスやケアの倫理において共通する問題提起こそが、「主体という近代的な考え方をどのように問い直すか」です。波平先生はどのような時間軸から考え、どのような人々のニーズに焦点を当てるのかによって、それはまったく多様な形をとる点が難しいと言います。例えば、令和6年能登半島地震における被災者がどのような生活を新たにスタートさせたいと考えるかは千差万別であり、

[基調講演・パネルディスカッション]

波平 恵美子 (お茶の水大学名誉教授・元九州芸術工科大学教授)
林 香里 (東京大学副学長・理事・大学院情報学環教授)
[パネルディスカッション]
(座長) 谷 正和 (九州大学大学院芸術工学研究院名誉教授)
中村 美亜 (九州大学大学院芸術工学研究院教授・DIDI副センター長)
工藤 真生 (九州大学大学院芸術工学研究院助教)

参加者: 91名 場所: 九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階 参加方法: ハイブリッド (Zoomオンライン or 対面) 時間: 15:00~18:00
スタッフ: 田中瑛 (DIDI特定プロジェクト教員)、真崎一美 (DIDIテクニカルスタッフ)、小黑伽菜 (DIDI事務補佐員)、菅野鈴子 (九州大学大学院生)、李紫涵 (九州大学研究生)、宮壽陽大 (九州大学学生)

[関連企画]

波平恵美子先生・林香里先生 書籍展示

本シンポジウム前後の日程で、芸術工学図書館において波平先生と林先生の著書を計12冊展示しました。

※データはp.12参照

範を問い直すことだと言います。しかしながら、現代社会ではますます個人化が進み、人間と社会をつなぎ止める中間集団が弱くなり、ケアを必要とする人もケアを提供する人も脆弱な個人として引き裂かれてしまっている。そのような問題提起が行われました。

ゲスト講師

林 香里 はやし かおり
東京大学副学長・理事、同大学院情報学環教授。専門はメディア・ジャーナリズム研究。博士(社会情報学・東京大学)。ライター・通信社東京支局記者、東京大学社会情報研究所助手、ドイツ・バンベルク大学客員研究員を経て現職。主な著書に『オンナ・コドモ』のジャーナリズム: ケアの倫理とともに』(2011年)、『メディア不信』(2017年)など。2021年から2023年に朝日新聞で連載「論壇時評」を担当。

一概に対応できるものではないというわけです。林先生は、ケアは「してあげる」といったパターンリズミックなものではないことに注意を促しつつ、多様性のある集団は個々で閉ざされておらず、透明性・オープン性があるのだと述べました。

そこから、話題は大学(組織)における多様性の在り方に移りました。林先生は、中世にまで歴史が遡る伝統的なアカデミアのシステムが、新たなことを学術に組み込むまでの障壁になることがあると指摘し、単純に多様性を重視するだけでなく、そこからアカデミアを改革する必要性を示唆しました。波平先生は、日本初の国立単科大学としての九州芸術工科大学(現・九州大学芸術工学部)の成り立ちを振り返り、芸術工学部自身が「アカデミズムとは何か」を一から問い直し、伝統に対抗するところから始まったと話します。組織の中に多様性を内包することで、デザインを含む新たな知を興す。これからの場づくりの在り方を思い描ききっかけとなるようなシンポジウムになったと言えるでしょう。

[全体司会]

朝廣 和夫 (九州大学大学院芸術工学研究院教授)
[開会挨拶]
尾方 義人 (九州大学大学院芸術工学研究院教授・DIDIセンター長)
[閉会挨拶]
尾本章 (九州大学大学院芸術工学研究院教授・研究院長)

「行政の現場における社会包摂デザイン」の調査・研究

デザインシンクタンクでは、仕組みのデザインに関する知見の体系化を目指し、学内外の現場の声を聞いて情報を集め、整理してきました。特に行政・NPOといったパブリックサービスの現場において、社会包摂デザインがどのように実装されているか、また、社会包摂的な動きができないケースの阻害要因は何なのか、どうすればそれを克服できるのか、といった実態の調査・研究を重ねてきました。

2022年度には2回にわたって「社会包摂デザインのプロセスを体験するロールプレイ型ワークショップ（以下、プロセス体験WS）」を実施。本学人間環境学研究院の田北雅裕先生が制作した、これから里親家庭で過ごす子どもたちのためのカードキット「TOKETA」の事例と、本学キャンパスライフ・健康支援センターの羽野暁先生が携わった、色覚の多様性に配慮して制作されたキャンパス案内図の事例を通して、社会包摂デザインを考える機会としました。今年度は、プロセス体験WSを企画したNPO法人ドネルモがさらに行政調査を重ね、小冊子『行政職員のための社会包摂デザイン超入門サポートブック』を作成しました。

デザインシンクタンク研究会

第1回：6月8日(木)、第2回：2024年2月1日(木)

今年度の第1回デザインシンクタンク研究会では、2022年度に実施したプロセス体験WSの振り返りを行いました。その中で「プロセス体験WSでは、社会包摂デザインが生まれるシーンを俳優たちに演じてもらい、それをみんなで見て追体験した。そのシーンで交わされた会話の中に、まったく別の事例でも使える社会包摂の種が大量にあったと思う」などの評価がありました。

第2回では、福岡県内の行政職員3名を対象にインタビュー調査を行った結果をNPO法人ドネルモの宮田智史さんが報告し、「実際に社会包摂デザインをやるという前の段階として、どうやって行政職員のマインドを育てるかというところに着目する必要がある」と話しました。宮田さんの報告を通して構成メンバーで議論を行い、「行政職員にとって、配慮が必要な少数の市民に関してリサーチしたり個別対応したりすることに時間をかけることが、非効率とか余計な仕事などと思われているのは課題だ」「マイノリティの人たちのために社会包摂的なパブリックサービスを行うこと、そのために時間やコストをかけることは、行政として価値のあることだ」という価値基準や考え方が育つことが、まず必要だ」「社会包摂デザインの視点を取り入れた成果物を作るための発注マニュアルのようなものがあるほうが、現場の行政職員たちが何か社会包摂的なマインドに気づいて動き出しやすいのではないか」といった意見が出ました。

構成メンバー

【社会包摂デザイン・イニシアティブ】

尾方 義人・中村 美亜・朝廣 和夫・長津 結一郎・田中英 (DIDI 教員)、白水 祐樹 (DIDI テクニカルスタッフ)

【アドバイザー (協力研究員)】

耘野 康臣 (NPO法人九州コミュニティ研究所代表)、大澤 寅雄 (合同会社コモンズ研究所代表)、宮田 智史 (NPO法人ドネルモ事務局長)

場所：大橋キャンパス

時間：(第1回)13:00~14:30、(第2回)10:30~12:00



2023年3月に実施したプロセス体験WSで、俳優が演劇形式で社会包摂デザイン制作の重要シーンを演じている様子
写真：雨宮康子

NPO法人ドネルモによる行政調査・小冊子制作

NPO法人ドネルモは、2022年度に実施したプロセス体験WSを踏まえ、行政組織においての、社会包摂デザインの取り組みによって現状を変えるための工夫点やポイント、阻害要因などをリサーチしました。そしてその調査結果を通して、プロセス体験WSの事例と行政組織の現場の実態とを比較検討しました。特に、プロセス体験WSの事例における視点やプロセスが、行政の現場で使えるものなのか、

どのようなところが使えて、使えないところはどのような課題があるのかについて、情報を収集・分析しました。それらの調査結果をまとめ、社会包摂デザインの取り組みを今後実施していく上でのヒントや工夫点を提供することを目的に、小冊子『行政職員のための社会包摂デザイン超入門サポートブック』を作成しました。

『行政職員のための社会包摂デザイン超入門サポートブック』

ページ 目次

P.1	表紙
P.2	目次
P.3	はじめに
P.4	社会包摂デザインって何？
P.5	社会包摂デザインって何？
P.6	行政職員にこそ社会包摂デザインが必要？
P.7	行政職員が抱えるジレンマ
P.8	社会包摂デザインのプロセスを体験するロールプレイ型ワークショップ
P.9	社会包摂デザインのプロセスを体験するロールプレイ型ワークショップ
P.10	「体験の共有」を組織内で取り入れる
P.11	「体験の共有」の事例
P.12	「仕組みの工夫」に挑戦してみる
P.13	「仕組みの工夫」の事例
P.14	まとめ
P.15	社会包摂やデザインについてもっと学びたい人のために 奥付
P.16	裏表紙

【仕様】

ページ数：16ページ

サイズ：A5サイズ

色：フルカラー

文字組み：横書き

※PDFデータ公開のみ

※データ提供については、「見開き形式」(冊子として閲覧できる)と「1ページごとに読める形式」(1ページごとに閲覧できる)の2つのバージョンあり

発行日：2024年3月31日 編集：NPO法人ドネルモ デザイン：河村 美季

主な読者対象：自治体の行政職員、NPO関係者など

企画者

宮田 智史 みやた さとし

NPO法人ドネルモ事務局長。1984年福岡生まれ。九州大学大学院芸術工学府修士課程修了。2012年、超高齢化社会に向け、「自分たちの暮らしを自分たちでつくる」文化的な社会を目指して、高齢社会のコミュニティづくりに取り組むNPO法人ドネルモを設立。そのほかに大野城市共働アドバイザー、福岡大学非常勤講師(生涯学習支援論)など。



社会包摂デザイン勉強会

九州大学には「社会包摂デザイン」に積極的に取り組む学生が多くいます。今年度の勉強会ではそのような学生たちに自らの体験談を語ってもらい、構成教員が質問を投げかけることで、活動に携わる人が抱く意識やプロセスを探りました。

世界水泳2023福岡大会のピクトグラム・屋外誘導サイン制作

2023年3月2日(木)

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会(以下、世界水泳)の開催に際して、福岡市からの依頼を受け、多様に配慮したピクトグラムや屋外誘導サインの制作に挑戦した3名の学生(制作当時)に話してもらいました。

一般的に、ピクトグラムはJIS(日本産業規格)に準じて制作されていますが、「ユニバーサルデザインの観点から新たなものを作る必要があるのではないか」という伊原先生の提言がきっかけで、このプロジェクトは始まりました。学生たちは、サインの案を繰り返し試作し、街頭でいろいろな人からフィードバックをもらいながら完成に近づけていくというプロセスを、実際のプロトタイプなどを見せながら説明してくれ、また、新たな事象で共通の感覚のないものを抽象的に表現する大変さを話ってくれました。



世界水泳の会場で実際に使用されたサイン



新しい概念である「ファンゾーン(当大会での呼称「FUKUOKA ICHIBA」)」のピクトグラムを学生が制作し、世界水泳の会場案内マップで実際に使われた



世界水泳の会場で使用された、学生が制作したジェンダーニュートラル(性的に中立)を意識したピクトグラム

発表

定田 睦 ひきだ あつし

2022年3月、九州大学大学院芸術工学府修士課程修了。2023年4月から芸術工学府技術職員(工作工房)。学生時代に「ジェンダー展」や第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会に向けたデザインプロジェクトに参加。



金子 千聖 かねこちさと

九州大学大学院芸術工学府メディアデザインコース修士2年。工藤研究室で、主に、ピクトグラム及びサインを含む情報デザインについて学ぶ。幼児を対象とした、ピクトグラムの理解度とそのグラフィックデザインに関する研究を行っている。



星野 純平 ほしのじゅんぺい

九州大学大学院芸術工学府メディアデザインコース修士2年。工藤研究室に所属し、特に知的障害者を対象とした調査研究や、案内サインのビジュアルデザインについて学んでいる。



場所:九州大学大橋キャンパス 1号館3階会議室

時間:15:00~16:00

運営スタッフ:尾方義人(DIDI教員)、田中瑛(DIDI特定プロジェクト教員)、白水祐樹(DIDIテクニカルスタッフ)

九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター(PS)

9月5日(火)

誰もがキャンパス内の資源にアクセスできるように活動を行う「九州大学アクセシビリティ・ピアサポーター」に参加する学生たち3名に話を聞きました。

三木さんは色覚多様性に対応したデザインのマニュアルの作成、上野さんは補助犬との関わり方に関する教職員向けのマニュアル作成、疋田さんは手話講座やノートテイク活動など、自分自身が参加した活動での体験談を基に鼎談をしてもらいました。いろいろな意見が交わされた中、特に間接的な支援に携わる立場から、実際に制作物が利用され、そのフィードバックをもらえると励みになるのではないかという問題提起もなされました。また、活動に参加していく中で、障害に対する理解を社会全体でもっと深めていく必要があるなど、課題も見えてきたようです。



場所:Zoomオンライン

時間:10:30~11:30

運営スタッフ:尾方義人(DIDI教員)、田中瑛(DIDI特定プロジェクト教員)、木下貴子(CXB)

イミグレーション・デザイン

11月14日(火)

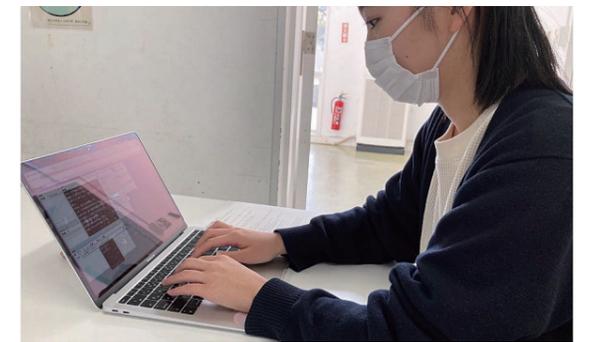
日本に来る人々にとって、出入国管理における複雑な手続きは大きな壁として認識されています。福岡空港や福岡出入国在留管理局(入管)の職員の方々とともに、入国や移民をめぐるデザインについて研究している尾方研究室の大学院生にお話をうかがいました。

高さんは福岡空港の出入国管理の空間や福岡出入国在留管理局(入管)の窓口を見学し、留学生の立場から何が課題かを整理しました。中でも後から追加された情報が混乱を招きやすいため、情報に色調や統一性を持たせた方が良いのではないかと提言があり、それを踏まえながら空港や入管の方々も交えて会話を行いました。最後に山田さんが、外国から来た親子を支援するツールとして開発した連絡帳を紹介しました。

場所:Zoomオンライン 時間:10:30~12:00

運営スタッフ:尾方義人(DIDI教員)、田中瑛(DIDI特定プロジェクト教員)、木下貴子(CXB)

協力:谷正和(九州大学大学院芸術工学府客員教授)、福岡出入国在留管理局、福岡国際空港株式会社、一般社団法人YOU MAKE IT



発表

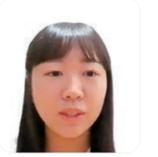
三木 まどか みきまどか

九州大学共創学部共創学科4年。卒業に向けてカラーユニバーサルデザインの普及等の調査、インタビューを中心に行っている。PSには新入生歓迎会での手話体験をきっかけに2年生のときから参加。



上野 真穂 うえのまほ

九州大学医学部保健学科看護学専攻4年。「ロコモティブシンドローム予防に向けた効果的な介入方法の検討」をテーマに、地域での高齢者への効果的な介入方法を研究している(卒論)。看護師・保健師を目指し、特に障害者への理解や支援方法、当事者の思いについて学びたいとPSに1年生より参加。



疋田 弥紅 ひきだ みく

九州大学大学院芸術工学府音響設計コース修士2年。PSには「手話を勉強したい」と学部3年生後期から参加し、2年間ほど活動。PSの影響を受け、修士課程では、どうすれば障害がある人が演奏会に行きやすくなるかの研究をしている。



発表

高 榕 Gao Rong

九州大学大学院芸術工学府未来共生デザインコース修士1年。行為との関係から見た空港情報システムのインクルーシブ性を高める研究、福岡空港外国人入国における情報システムの排除感の除去のための表現形式の研究を行っている。



山田 和佳 やまだわか

九州大学大学院芸術工学府未来共生デザインコース修士2年。情報デザインなどを学ぶ。学部時代に行った卒業研究「小学校における外国人家族と担任教諭のコミュニケーションについての研究」を基に制作した「入学当初の外国人親子と担任をつなぐ連絡帳」で、2023年度グッドデザイン・ニューホープ賞を受賞。



自治体との連携

福岡市、筑紫野市、直方市などの自治体と協力しながら、新たな啓発の仕組みを考えています。人権啓発や男女共同参画担当などの現場の行政職員からは、「従来の講演会開催のような啓発方法では、もともと関心の高い少数の市民は何度も参加する一方、そうでない市民へのアプローチが大きな課題となっていた。そのため、より広く、特に若い世代にアプローチするための工夫を常に考えている」といった声がよく聞かれます。各自治体で、新しい展示方法や、音楽や工芸など子育て世代が興味を持ちやすい要素をプログラムに取り入れるなど、様々な工夫をしながら模索が続けられています。また、「多様な人々の声を取り入れること」をテーマとした表現や対話のデザインを考える公開講座も実施しました。

第25回のおがた男女共同参画フォーラム

2023年2月23日(木・祝)

福岡県直方市では2023年4月から市内すべての中学校において、新しいブレザータイプの制服(標準服)を導入しました。当フォーラムでは、その新しい制服の展示も行われました。この標準服は、2016年ごろに市民から行政側へ「家計負担軽減のため市内4校の制服デザインを統一し、

リユースしやすくして欲しい」と要望があり、その後さらに「ジェンダー平等の観点からも、男女共通デザインの標準服で、なおかつスラックスかスカートかを性別に関係なく自由に選べるように」と市議会でも議題に挙がりました。そこからアンケート調査で保護者や中学生の意向を把握するなど数年間の検討を経て、最終的に市内4校の生徒会役員らがデザインを選んで決定し、導入されたものだそうです。

このフォーラムにDIDIの「ことばとジェンダー展」「ひとがたとジェンダー展」などの作品を展示することで、従来の啓発講演会形式とは違った効果が得られるのではないか、という行政職員からの発案により、DIDIも協力して展示を行いました。

場所：直方市中央公民館 時間：12:00～15:00
入場料：無料
主催：のおがた男女共同参画フォーラム実行委員会



会場の様子。「ことばとジェンダー展」などの作品も展示した。展示レイアウトはすべて、一般市民も参加している実行委員会メンバーや、市の職員らで自主的に考えて実施された

男女共同参画ふちフェスタ

展示「ルールとジェンダー」

6月17日(土)～30日(金)

講演会「ジェンダーって何?身近な問題に気づく力」

6月24日(土)

福岡県筑紫野市との連携で展示と講演会を行いました。
※詳細、データはp.26参照

九州大学公開講座「表現と対話から考えるためのデザイン」

11月4日(土)

福岡市との連携で公開講座を行いました。様々な声を取り入れながら未来の社会の在り方を構想し、社会に働きかけたり、新たなサービスを生み出したりする実践は、多様性のある社会の実現に向けた重要な課題となっています。特に従来の性的な役割や規範を前提に生み出されてきた社会の仕組みをどのように変えていくのかは、行政、教育、福祉、メディアなどのあらゆる領域で議論されています。

この講座では、行政職員、デザイン関係者、大学関係者などの参加者とともに、デザイン、メディア、コミュニケーションの観点から、表現と対話を共に生み出すための場づくりについて様々なワークショップをしながら考え、理解を深めました。

参加者：7名 場所：福岡市男女共同参画推進センター・アミカス2階視聴覚室 時間：13:30～16:30 参加費：無料
講師：尾方義人(DIDI教員)、田中瑛(DIDI特定プロジェクト教員)
主催：九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ、福岡市男女共同参画推進センター・アミカス

第1～3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」総括

福岡市男女共同参画推進センター・アミカスからの「若い世代を主な対象とし、ジェンダー平等について考えるきっかけをつくりたい」という要望により、福岡市とDIDIが連携して、2021年に第1回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」が開催されました。その後、第2回、第3回と重ねてコンテストを実施し、地元新聞社やテレビ局からも報道されました。その3年間を振り返ります。

幅広い出品者層

当コンテストは九州大学の授業「社会包摂とデザインB」(p.29参照)と連携して行われました。授業ではDIDI教員に加え行政職員、写真の専門家、コピーライターなど各分野の専門的知見を持つ講師が講義を行い、受講者は「公共(パブリック)とは」といった社会的テーマのほか、写真撮影やコピーライティングの実践的な技法も学びました。授業の一部はオンラインで配信し、学外からのコンテスト参加者も受講できるようにしました。第1回から第3回まで毎年100作品以上の応募があり、社会人や、九州大学以外の大学生、さらに高校生、中学生、小学生からも出品がありました。

写真が切り取るシーン、「ことば」が表現する心情

「写真とことば」を組み合わせたポスター作品を募集する当コンテストでは、様々な日常のシーンを切り取った写真と、それにまつわる心情を表現した「ことば」が見られました。履歴書の性別欄、キッチンで料理をする人、寄り添うカップル。私たちがふだん、何も気に留めずに目にしていく風景が、写真という形で切り取られることで、ポスター作品を見る人に「このシーンとジェンダーと、何の関係があるのだろうか?」と思わせます。そして、

[第3回より]



最優秀賞 山田智博さん



優秀賞 宮田翼さん



優秀賞 高山瑛梨花さん

その写真に添えられた「ことば」が、作品制作者の心情を表現するとともに、同じような境遇の人の思いを代弁します。実際の場面ではなかなか口にできず、飲み込んだままになっている、そんな「沈黙のことば」が作品上で表現されているものも多く見受けられました。

ものの見方が変わるきっかけ

「啓発」を目的とした従来の標語や明快な図柄を基調としたポスターは、ストレートな表現で「わかりやすい」ということが利点であるものの、ややもすると「上から目線で押し付けがましい」「説教くさい」と感じられてしまう傾向もあります。また、見た人の意識を素通りし、なかなか行動変容につながらないという課題もあります。一方、「写真とことば」で表現される当コンテストのポスター作品は、見た人に「考えるきっかけ」を与え、「私の身近にも、こういう気持ちの人がいるかもしれない」という気づきをもたらします。そうした気づきを得た人は今後、ポスター作品で見たものと似たようなシーンに出合ったとき、「気づきを得る前」とは違った価値観でそのシーンを見つめ、今までとは違った言動をとるかもしれません。このような一人ひとりの「ものの見方」の変化の積み重ねによって、社会が変わってゆくのではないのでしょうか。

デザインシンクタンクでは、社会包摂デザインの概念構築を支援するための様々なツールを開発してきました。それらを12、13ページで紹介します。35ページ「社会包摂デザインを考えるための道具」も参照ください。

社会包摂デザイングレートブックス (Great Books for Diversity & Inclusion)

「社会包摂デザイン」とは何なのか？ どのような視点で社会を見つめ、社会の課題を捉え、それを解決する仕組みをデザインしていけばよいのか？ そうしたことを学び、実践していく上で役立つ書籍をDIDI構成教員から推薦してもらい、「社会包摂デザイングレートブックス」としてまとめました。

芸術工学図書館の協力を得て、11月には40冊の書籍を、2月にはシンポジウム (p.4-5参照) 関連書籍12冊を展示しました。また、九州大学附属図書館ウェブサイト上にも読書ガイドページを設置しており、右の二次元コードからご覧いただけます。



社会包摂デザイングレートブックス展示企画

11月8日(水)~30日(木)

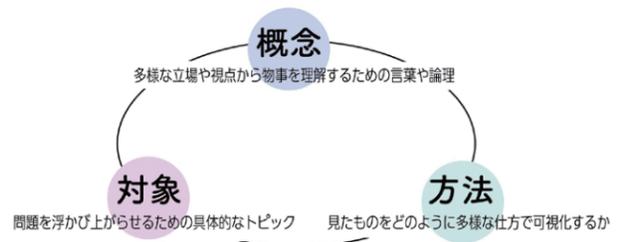
芸術工学図書館所蔵の書籍から40冊を選抜し、それらを「概念」「対象」「方法」の3つのカテゴリーで紹介しました。社会学、ジェンダー、アート、グラフィック、建築、経済学など幅広いジャンルの書籍を展示し、関心のある分野を入口として社会包摂デザインを考えてもらうための機会としました。

2024年2月19日(月)~3月6日(水)

2月28日開催のシンポジウム (p.4-5参照) の関連企画として、波平恵美子先生と林香里先生の著書を展示しました。



11月のグレートブックス展示会場の様子



場所：九州大学 芸術工学図書館1階閲覧ホール 時間：9:00~21:00 (最終日のみ13:00まで) 主催：社会包摂デザイン・イニシアティブ
協力：九州大学 芸術工学図書館 運営スタッフ：尾方義人 (DIDI教員)、田中瑛 (DIDI特定プロジェクト教員)、小黒伽菜 (DIDI事務補佐員)

スキット

社会包摂デザインのプロセスをスキット (演劇) 形式で再現し、追体験できるワークショップを行いました。



ワークショップアーカイブ動画の一部

シビックデザインワークショップ

「対話の場を創る」ためのワークショップの手法をリーフレットにまとめました。2024年4月に改訂版を公開予定です。



2022年度に作成したリーフレットの表紙

リーガル・デザイン・ディクショナリー (Legal Design Dictionary)

私たちの身近なあらゆる場面に、様々なルール (法律や、明文化されていない慣習なども含む) が関わっています。多様な人々が共に生きる包摂的な社会を築こうとする際、既存のルールが壁となると、まず、そのルールがいつ、どんな目的で、どのように作られたのかを知ることが大切でしょう。また、ルールを変えたり、既存のルールを廃止する、あるいは新しいルールを作ることが必要な場面もあるでしょう。

「リーガル・デザイン・ディクショナリー」には、社会の「しくみ」を考える一助として使っていただけるよう、社会包摂に関わる法律、ルール等をまとめています。DIDIウェブサイト上に設置しているディクショナリーページにて、項目名の50音順での閲覧に加え、ジャンルタグから関連分野ごとの閲覧もできます。右の二次元コードからご覧いただけます。



Legal Design Dictionary

ALL 子育て 憲法 人権 ジェンダー 障害

男女共同参画

男女共同参画社会基本法第2条で「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ...

ディクショナリーページの一部

社会包摂年表 (Chronology)

世界や日本における福祉政策などの歴史を時系列で調べられるよう、社会包摂に関する出来事、法律・制度の成立などを、年表でまとめています。2024年4月にDIDIウェブサイト上で公開予定です。

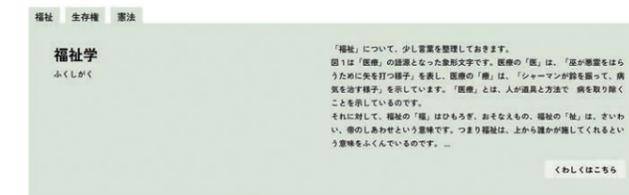
Chronology ~ 1900

1601	エリザベス教養法 (イギリス)
1722	労務場 (ワークハウス) テスト法
1782	ギルバート法
1795	スピーナムランド法
1833	工場法
1834	新教養法

社会包摂年表ページの一部

社会包摂インデックス (Index)

社会学、哲学、経営学、デザイン学、福祉学などといった学問ジャンル別に、その学問を社会包摂デザインの観点から学ぶための基礎知識インデックスをまとめています。2024年4月にDIDIウェブサイト上で公開予定です。



社会包摂インデックスページの一部

学内における子育て支援の実態に関する調査

九州大学では、2022年3月14日に「ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン推進宣言」(DE&I宣言)を発表し、「すべての構成員が、その属性や価値観、経験の違い等にかかわらず、個人の能力を最大限に発揮できる環境が必要です」と宣言しました。芸術工学研究院が拠点を置く大橋キャンパスにも、出産や育児、介護、その他などの様々な事情を抱えながら働く教職員がいます。このことを踏まえて、DIDIでは2023年11月に期間限定のタスクフォースを結成し、大学内の教職員の子

育てをめぐる事情を調査しました。育児経験のある芸術工学研究院所属の教職員64名(教員25名、職員39名)、一般回答者475名から回答をいただき、「個人的なこと」として見落とされがちなライフワーク・バランスの課題を浮き彫りにしました。調査結果は、資料「子育てしやすい職場環境のデザインに向けて」としてまとめています。多様な個人の生活に応じた働き方を芸工の内側から模索すべく、対策を検討しています。



資料「子育てしやすい職場環境のデザインに向けて」の表紙および内容の一部



担当教員
田中 瑛 たなか あきら
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門助教。博士(社会情報学・東京大学)。専門はメディア・ジャーナリズム研究。SNS時代のメディア・ジャーナリズムにおける「声」の問題や「真正性」の構造を研究してきた。共著に『AIから読み解く社会——権力化する最新技術』『東京オリンピックはどう観られたか』など。

長津 結一 ながつ ゆういちろう
→ p. 22 参照
工藤 真生 くどう まお
→ p. 25 参照
尾方 義人 おがた よしと
→ p. 26 参照

オンライン海外調査 包摂型社会に向けた未来の協働と自治の可能性

田中 瑛 (DIDI 特定プロジェクト教員)

近年、生産活動に徹する旧来の社会が限界に直面していることが指摘されています。何よりも際限のない成長の追求と生活時間の枯渇が、生を不安定化したり、いびつな格差や不寛容を招いていることが問題とされてきました⁽¹⁾。グローバル化が進み、プラットフォームがもたらす利潤を少数のアクターが独占してしまう構造も批判されています⁽²⁾。このようにして生じる(より速く、効率的に)時間を使い、自分を高める努力を強いられる社会)では、ますます多くの人が包摂の網の目から取りこぼされてしまいます。それでは、私たちはどのように異なる選択肢を想像することができるのでしょうか。包摂型社会の再構築に向けた動向とその先端的な実践を紹介していきます。

まずは、人工知能(AI)やロボットを利用した仕事の自動化の可能性が挙げられます。経済学者のジョン・メイナード・ケインズは1930年のエッセイで、100年後には1日3時間も働けばほとんどの人は満足する社会が到来すると述べました⁽³⁾。しかし、DIDIのタスクフォースが実施した調査(左ページ参照)にも見受けられる通り、多くの人が長時間働きながら余裕のない状態で出産・育児をしたり、生活が成り立たない不安定な地位に置かれて孤立する現状があります⁽⁴⁾。そうした中で、自動化技術を極限まで発展させて生産を維持しつつ、ユニバーサル・ベーシックインカム(サービス)などを通じて、その利潤を公正に分配し労働時間を減らす。こうした社会構想を追求する必要性が唱えられてきました⁽⁵⁾。自分が意義を感じる活動に参加したり、他者と共に過ごし、ケアの関係を大事にする時間を紡ぎ出すことで、より多様で寛容な社会が実現するとも考えられそうです。

そして、「プラットフォーム協同組合」と呼ばれる考え方にに基づき、民主的自治に基づく生活基盤の変革を求める動きが生じてきました。これは、労働者、生活者、利用者自身が日常生活に必要な生産・消費の基盤をシェアし、その運営の在り方について参加者全員が議決権を持ち決めていく仕組みです⁽⁶⁾(右上図参照)。例えば、民泊シェアリングサービスの「AirBnB」に対する異議申し立てから始まった「FairBnB」(fairbnb.coop)は地域行政とも連携し、プラットフォームを運営して得られた利潤を地域に還元しながら、低価格でサービスを提供することに成功しています。

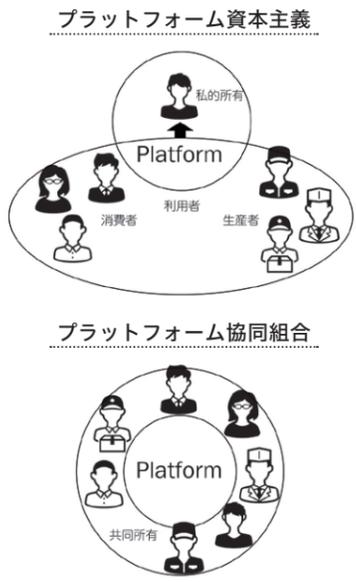
「Twitter」(現「X」)をみんなで買収してヘイトスピーチのないSNSに生まれ変わらせる「#BuyTwitter」と

いう取り組みも見られました。また日本でも2022年に労働者協同組合法が施行され、労働者全員が共同経営者となる労働者協同組合(ワーカーズコープ)が法人格を取得できるようになりました。「Web3」と呼ばれるインターネット構想においては、ブロックチェーンを活用した所有権の認証を通じてこうしたプラットフォームの共同所有を促すことで、DAO(分散型自律組織)のように誰もが対等に意思決定に参画できるネットワーク社会の在り方も構想されています。

もちろん、「技術変革が私たちの社会を変えてくれる」と考えるだけでは、監視や搾取、人権侵害を引き起こしかねない点にも注意が必要です。第5回社会包摂デザイン研究会(p.16参照)で指摘されたように、中立に見えるものを問い直す批判の視座を携えつつ、誤謬性を許容しながら問題を提起し続ける。こうした動的なデザインを通じて社会包摂に向かっていく必要があります⁽⁷⁾。

[参考文献]

1. ジョナサン・クレーリー『24/7 眠らない社会』(2015年、岡田温司監訳、石谷治寛訳、NTT出版)、ハルトムート・ローザ『加速する社会 近代における時間構造の変容』(2022年、出口剛司監訳、福村出版)。
2. Couldry, Nick and Ulises A. Mejias, *The Costs of Connection: How Data is Colonizing Human Life and Appropriating it for Capitalism* (2019, Stanford University Press)、ニック・スルネック『プラットフォーム資本主義』(2022年、大橋完太郎・居村匠訳、人文書院)。
3. Keynes, John Maynard, *Economic Possibilities for our Grandchildren* (1930)
4. ナンシー・フレイザー『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』(2023年、江口泰子訳、ちくま新書)、デヴィッド・グレーバー『ブルジョア・ジョブ: クソどうでもいい仕事の理論』(2020年、酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳、岩波書店)
5. アーロン・バスターニ『ラグジュアリー・コミュニズム』(2021年、橋本智弘訳、堀之内出版)、Srnicke, Nick and Alex, Williams, *Inventing the Future: Postcapitalism and a World Without Work* (2015, Verso)
6. ネイサン・シュナイダー『ネクスト・シェア—ポスト資本主義を生み出す「協同」プラットフォーム』(2020年、月谷真紀訳、東洋経済新報社)



社会包摂デザイン研究会 第5回「デモクラシー」

10月11日(水)

特定の専門家や権威だけで物事を決めるのではなく、多種多様な市民が参加し議論を重ねながら物事を生み出していく。そうした民主的なデザインの可能性と困難さについて、学内外の3名の登壇者に話していただきました。

中立で正しく見えるものの持つ権力性を問い直す

まず、古賀先生から「デザインの民主化」の直面する問題が提起されました。民主主義は意見の複数性を尊重する姿勢を重視する理念である反面、行為が多様に解釈されるといって対立やトラブルを招くと古賀先生は言います。そして、様々な価値観が共存する政治を機能させるための枠組みとして知られるのが「法」であり、デザインもそうした法的性格を持っているものの、複数性を尊重しながら誰もが解釈できる統一性のあるルールを提示する目論見は、必然的に隠された利害関係を生み出してしまいうために中立ではあり得ないのではないかと問い掛けました。社会課題を「解決する」というときの、一見すると中立で正しく見えるデザインこそ、そこにどのような不完全性があるのか、疑いの余地があるのかについて検証する必要があるようです。

佐野先生はジェンダー平等を民主主義の成熟度の指標として捉え、ドイツの妊娠中絶法制改革がどのようなプロセスを経て遂行されたのかを紹介しました。意図せず妊娠をしても中絶すれば刑罰が下るかつての法制は、自分の身体は自分自身のものだという「リプロダクティブの自己決定」の原則を、中立なものとして設計された法の中で蔑ろにしてきた一例だったと言えます。しかし、活動参加者がデジタル空間で連帯し、ボトムアップな運動を展開していく中で、政権側もその声を無視できなくなり、社会が変わっていく。デジタル化とジェンダー平等が同時進行し、加速する流れが現政権ではますます強まっているとの見解を示しました。こうした事例から考えられるのは、デジタル空間をデザインする意思決定層にも多様な人々が包摂される必要があるということでしょう。

意思決定の前に欲望形成をする

富樫さんは株式会社 issues、一般財団法人公共とデザインで実践してきた意思決定や主体性を生み出す取り組みの中から、日常生活の中にある欲望を政策的な次元での意思決定に結び付けるプラットフォームについて紹介しました。富樫さんが実践してきた中で、デジタル空間での熟議には、ごく一部の活動的な市民しか参加しないなどの問題があり、「そもそも誰もが意思決定に携わりたいと考える前提自体が間違っているのではないか」という気づきから、意思決定に関与する動機や欲望を生み

出す仕組みを構築する必要があるのではないかと考えているそうです。「産まみ(む)めも」というプロジェクトを立ち上げ、「産む」ということに対する自分自身の物語を参加者が一緒につづることで、いろいろな価値観を包摂していく試みを展開しているなどの事例も話してくれました。



[登壇者・講演タイトル] 敬称略
古賀 徹「デザインと政治をめぐるパラドックス」
佐野 敦子「デジタル化時代の民主主義—ドイツの妊娠中絶法制改正の動向から考える課題—」
富樫 重太「欲望形成と意思決定の支援としてのデザイン」
[司会]
田中 瑛(九州大学大学院芸術工学研究院助教)

参加者: 54名 場所: 九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階
参加方法: ハイブリッド (Zoom オンライン or 対面) 時間: 18:00~19:30
運営スタッフ: 田中瑛 (DIDI 特定プロジェクト教員)

講師

古賀 徹 こがとおる
九州大学大学院芸術工学研究院教授。専門は哲学。近現代の欧米圏の思想を中心に研究を進める。水俣病やハンセン病、環境破壊、全体主義、消費社会など、現実の諸課題に即して思考を続ける一方で、デザインの基礎論の構築を試みる。単著に『理性の暴力 日本社会の病理学』(青灯社、2014年)、編著に『デザインに哲学は必要か』(武蔵野美術大学出版局、2019年)など。



佐野 敦子 さのあつこ
博士(社会デザイン学)。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士後期課程修了。国立女性教育会館専門職員(eラーニング担当)、東京大学大学院情報学環特任研究員を経て、現在、立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託。2023年春に単著『デジタル化時代のジェンダー平等—メルケルが拓いた未来の社会デザイン』(春風社)を上梓。



富樫 重太 とがしげた
デザイン会社、メディア会社などに勤務後、株式会社 Periods を創業し、複数のスタートアップ企業のデザイン、プロトタイプング、立ち上げに従事。2018年に株式会社 issues を共同創業。住民の困りごとを自治体に届け、政策で解決するサービス「issues」を開発。2021年に一般社団法人公共とデザインを設立。



ソーシャルアートラボ/シビックデザインラボ

Social Art Lab - Civic Design Lab

- Project 1 障害を有する人との映画制作
- Project 2 未来の児童養護施設のデザイン
- Project 3 認知症ケアの場における芸術活動
- Project 4 自然の循環と協働体の再生のためのアート実践の仕組み—物語からのアプローチ
- Project 5 「半農半アート」を基盤とした地域づくりの仕組み
- Project 6 救急のしくみのデザイン
- Project 7 イミグレーション・デザイン
- Project 8 多様性に応えるピクトグラムのデザイン
- Project 9 ジェンダー/LGBTsのデザイン

障害を有する人との映画制作

知的障害、精神障害とはどのような障害かと問われると、説明が難しいかもしれません。知的・精神障害には、医学診断である障害の種別、程度の違いを超えて、生育、経験の差異によって生まれる「見え方」「感じ方」の多様性が存在します。本プロジェクトは、知的・精神障害当事者（以下、当事者）の多様な視覚・思考世界を映画で表現するために、当事者が主体となり、クリエイターの支援を受けて「自分で」映画を創り、不可視化されてきた知的・精神障害者の世界を広く社会に発信することを目指しています。

今年度の活動

日本を代表する映画監督である瀬々敬久監督主導のもと、7名の知的・精神障害当事者の方と撮影・編集ワークショップを行い、1人につき個人映画「夏ver.」「秋ver.」の2本を制作しました。個人映画とは、個人が制作する絵画や彫刻や詩のように個人が作る映画であり、その中でも特に、プライベートな日常をつづったような私的な視線に特徴を持つ「日記映画」をヒントに制作を進めました。

一方で、石田智哉監督が中心となり、映画制作プロセスやプロジェクトミーティングの様子について、ドキュメンタリーとして構成を進めました。知的・精神障害当事者7名と、参加した学生を対象にインタビューを実施。「撮影」「編集」ワークショップの効果・影響など、それぞれの行動変容の分析を進めました。メンバー間では、ワークショップを振り返り「障害の社会モデル」についての考えを深めました。

上)映写機から投影された映像を見る
下)「編集」ワークショップで、映像を介してコミュニケーションをとるBさんと瀬々監督(右)



キックオフミーティングと施設見学

6月9日(金)、10日(土)

- キックオフミーティング
- 障害者生活就労支援施設 社会福祉法人野の花学園 なのみ学園 見学
- 社会福祉法人JOY明日への息吹 アトリエブラヴォ (絵画) 見学
- 古川加恵さんと瀬々監督、脚本家港氏の対談

「映画とは何か&撮影01」ワークショップ

7月21日(金)

場所: JOY 明日への息吹 1階音楽ホール、志免福祉公園



スマートフォンで撮影するCさん

担当教員

工藤 真生 くどうまお →p.25参照



高取 千佳 たかとりちか

九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門准教授。博士(工学・東京大学)。専門は景観生態学、都市計画。主な著書に『Labor Forces and Landscape Management』など。



早瀬 百合子 はやぶち ゆりこ

九州大学グローバルイノベーションセンターアドバンストプロジェクト部門准教授。博士(エネルギー科学・京都大学)。専門は環境工学、温室効果ガス排出量算定方法論、環境政策評価、環境教育。

「映画 編集01」ワークショップ

9月2日(土)、3日(日)

場所: JOY 明日への息吹 宿泊練習室

「映画 編集02 & 撮影02」ワークショップ

11月25日(土)~27日(月)

場所: JOY 明日への息吹 宿泊練習室、志免福祉公園

第1回上映会開催(予定)

2024年4月

場所: JOY 明日への息吹 1階音楽ホール

参加: 瀬々敬久(映画監督)、港岳彦(脚本家)、石田智哉(映画監督、博士後期課程学生)、古川加恵、障害を有する成人7名、緒方克也(JOY 明日への息吹理事長)、早瀬百合子(九州大学グローバルイノベーションセンターアドバンストプロジェクト部門准教授)、高取千佳(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)、工藤真生(DIDI 教員)、星野純平・疋田弥紅・山田杏奈(九州大学修士2年)、木森理梨香(九州大学卒業生)

協力: 社会福祉法人野の花学園 なのみ学園、社会福祉法人JOY 明日への息吹

未来の児童養護施設のデザイン

埼玉県の子童養護施設「光の子どもの家」を舞台として、「未来の児童養護施設は、どのような形が望ましいのか」について、子どもたち、施設職員、地域住民など様々な関係者との対話ワークショップを通して考えようというプロジェクトです。刀川和也監督が2003年から2011年までの8年間をかけて「光の子どもの家」で撮影し、制作したドキュメンタリー映画『隣の人』を通して、「本当の意味での子どもたちのための、子どもたちの施設とは何か」を考えます。DIDI や学内の専門の教員らと協働し、施設・空間を検討することを目的としたデザインワークショップを企画し、共に場を生み出す者として包摂的に関われる雰囲気自然に生まれるような、施設の運営の方針や改修・改築デザインの方針を明確化していきます。

今年度の活動

映画『隣の人』上映&刀川和也監督トークセッション ~創設から40年、ある児童養護施設の現場から「これまで」の何を守り、「これから」なにを変えていくのか~ 12月14日(木)

ドキュメンタリー映画『隣の人』の上映後、刀川和也監督が映画の舞台である児童養護施設「光の子どもの家」について話しました。

「光の子どもの家」は1985年に「本当の意味での子どもたちのための、子どもの施設をつくろう」という理念で創設。当時の児童養護施設は大規模型が主流であった中、地域化・分散化・小規模化を目指しており、「家庭的処遇」を重視したその一例として「子どもたちは、自分たちで選んだ食器を使っていた」というエピソードが紹介されました。「家庭の当たり前の日常」を失った子どもたちにとって、そうした一つひとつの「暮らし」が大切であることを、撮影開始当初の刀川監督は気づかず、「こんな日常風景だけを撮っていて映画になるの?」と思っていたそうです。その思いを、友人である稲塚由美子さん(ミステリー小説評論家)に映像を見せて相談したところ、「これ、すごいね。保育士さんが子どもに絵本を読んであげたり、冬の寒い日に手にクリームを塗ってあげたり。子どもたちというのは、こういうもので生きているんじゃないの? 一個一個の日常のにおい、食事を一緒にする、そういう日常の些細なこと、これが宝物じゃないの?」と言われ、それをきっかけに「日常」の意味の大きさがわかったと話します。その後、稲塚さんとは本作を共同制作していくことになったそうです。8年間で撮影した約600時間の映像を最終的に映画として編集する際、朝起きてから夜寝るまでという1日の時間の流れが何日間かあるように、時間の中にシーンを組み込んで、「暮らし」の時間を感じられる構成にしたという制作過程も語られました。

また、撮影当時と現在との社会の違い、特に施設職員の労働形態の変化や、働き手の確保の困難さについて触れ、未来の児童養護施設の在り方を考える問題提起をされました。それを受けて田上先生は「建物などの環境と、人と、そこで行うプログラムがセットなので、表面上だけでは見えないものをどうやって見抜いていくかということが重要になる」と話しました。さらに質疑応答では、参加者からの「インクルーシブやダイバーシティが叫ばれる世の中になってきているはずなのに、社会が寛容性を失っているようにも感じる。何か考え方のヒントはありますか」という問いかけに対し、刀川監督は「地域と関わりつつ、変に迎合するでもなく、大事だと思っていることは大事だと一生懸命語りながら、でも、“今のことはわからない”という視線を持つこと。“私たち年長者は現代のことはわからないので、若い皆さん、教えてください」という謙虚さが大切」と答えていました。



映画上映前に挨拶をする刀川監督

講師

刀川 和也
たちかわ かずや

アジアプレス・インターナショナル所属。フリーの映像ジャーナリストとして、2001年から2002年にかけて、アフガニスタン空爆の被害を取材し、テレビなどで発表。その後は主に、国内及び東南アジアでカメラマン、取材ディレクターとしてテレビドキュメンタリー制作に携わる。述べ8年にわたる撮影を経て『隣の人』を完成させた。本作が初監督作品。

参加者: 27名

場所: 九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階

時間: 15:00~18:00

参加費: 無料

参加: 刀川和也(映画監督)、田上健一・田中瑛(DIDI教員)、小黒伽菜(DIDI事務補佐員)

担当教員

田上 健一
たのうえ けんいち

九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門教授。副理事/芸術工学研究院・副研究院長。博士(工業・東京大学)。住宅をはじめとして教育・文化・医療施設など、日常生活に不可欠な建築のデザイン計画が専門。特に、人間と環境が相互に浸透し合う個性的で魅力的な空間の実現方法を、ユーザーの視点に立脚して考えている。建築や地域のデザイン(調査・企画・計画・設計)に携わる専門家の養成が主目標。



認知症ケアにおける芸術活動

認知症ケアにおいて、即興的で共創的なアート活動は認知症本人だけでなく、介護者にも良い影響を与えていると言われています。しかし、実際にどのようなメカニズムで効果が得られるのか、活動をどう評価すれば良いのか、医療や介護におけるケアとの違いは何かなどについては、まだよくわかっていません。そこで2020年から、ラボラトリオ株式会社、NPO法人ドネルモと共同で、共創的なアートが変化を生み出す仕組みや効果的な活動のデザインについて研究を行っています。

今年度の活動

認知症と共創的アート活動研究会

7月～2024年3月(4回)

福祉領域での芸術活動に詳しい有識者を招き、研究チームのこれまでの研究成果や、これから実施する調査の方向性について意見をうかがうオンラインの研究会を行いました。

共創的アートワークショップ

8月7日(月)、28日(月)、9月21日(木)

認知症ケアの場における芸術活動について、これまでの実践例や研究から、参加した高齢者のポジティブな効果だけでなく、介護者と高齢者の関係性の改善にも効果があることが示唆されています。本研究では、アートワークショップのどのような要素が、日常のケアに変化をもたらすのか、またその変化はどのように現れるのかを明らかにすることを目的に、介護者と認知症の人が同じ立場でアート活動と向き合い、共に楽しみ、共に創るアートワークショップを、演劇人のチーム「結実企画」とともに3回実施しました。また実施後に、介護者とアーティストにインタビューを行いました。



上)参加者一人ひとりの名前を呼んでいる様子

上)運動会がテーマの回。迫真の綱引き観戦

下)運動会がテーマの回。紅組と白組に分かれて玉入れ競争

下)ぬいぐるみに自分で名前を付け、ぬいぐるみが好きな食べ物や趣味を紹介

場所：小規模多機能ホームひまわり大楠 時間：13:00～16:00(各回とも)



担当教員

中村 美亜 なかむら みあ

九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門教授、博士(学術)。専門は芸術社会学。芸術活動が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みの研究、またその知見を生かした文化政策やアートマネジメントの研究を行っている。訳書に『芸術文化の価値とは何か』、編著に『文化事業の評価ハンドブック』、単著に『音楽をひらく』など。

自然の循環と協働体の再生のためのアート実践の仕組みー物語からのアプローチ

自然災害による被災者の心のレジリエンスの回復をテーマに、2021年度・2022年度から継続。アートによる精神的で能動的な現実経験＝「物語」による自己理解の深化が、意識のつながりを再生すると仮定し、社会的分断や孤立を防ぐための協働での「物語」の創造・共有・伝達の過程や実践の仕組みを検証し、明らかにしています。また、このようなアート実践を行うために必要な連携体制についても検討し、将来世代の社会教育に応用できる理論の構築を行っています。

今年度の活動

ARを用いた秋月観光支援ゲーム《秋月AR探検譚》の制作

4月24日(月)、5月29日(月)

AR(拡張現実)技術を活用して、福岡県朝倉市秋月にゆかりのある黒田長興、緒方春朔、原采蘋といった歴史上の人物を再現し、訪れる人々に歴史的な体験を提供することを目的とした取り組みです。秋月の町並みにARを使って人物を立体的に出現させ、その人物があたかも目の前で話しかけてくるように感じられ、ゲームのように楽しみながら秋月藩の歴史を学ぶことができます。

秋月は「筑前の小京都」と称される観光名所ですが、2017年の九州北部豪雨災害とその後のコロナ禍によって観光業が大きな痛手を受けました。秋月のにぎわいを取り戻したいという地元の方々のニーズに応えるため、秋月在住で伝統工芸「甘木絞り」作家の西村政俊さんの提案で、この活動がスタートしました。

(4月24日 現地調査)

主な訪問場所：杉の馬場、秋月城跡黒門、西念寺、石田家住宅(県指定有形文化財)、日ノ目スタチオ

時間：13:00～17:00

参加：西村政俊(日ノ目スタチオ代表)、知足美加子(DIDI教員)、藤原旅人(九州大学大学院工学研究院学術研究員)、九州大学大学院生・学生(5月29日 予備実験)

場所：九州大学大橋キャンパス構内

時間：14:50～18:10

参加：知足美加子(DIDI教員)、九州大学大学院生・学生

《鬼杉不動童子(矜羯羅童子・制吒迦童子)》制作

2023年度～制作中

2022年に英彦山神宮・下津宮に彫刻《鬼杉不動》を奉納しました。この不動明王像は、英彦山の国指定天然記念物「鬼杉」(樹齢1200年)の落枝から制作したものです。平成3(1991)年の台風19号によって被災した巨大な枝は、不動明王を彫ったもののほかにもう一つありました。その落枝で、不動明王の脇侍である「矜羯羅童子」と「制吒迦童子」を彫るべきではないかと考え、鬼杉に何度も問いかけながら制作しました。

矜羯羅童子・制吒迦童子は「静と動」を表しており、矜羯羅は優しく従順、制吒迦は強く荒々しい性質を持って不動明王を護るとされます。台座と持ち物は今後制作します。台座は英彦山の山頂部にある千本杉の倒木を使う予定です。

協力：高千穂有昭(英彦山神宮禰宜)、杉岡製材所



担当教員

知足 美加子 ともとり みかこ

九州大学大学院芸術工学研究院メディアデザイン部門教授、博士(芸術学)。彫刻家(国画会会員)、日本山岳修験学会評議員(英彦山山伏「知足院」の子孫)。中越地震、東日本大震災、熊本地震、九州北部豪雨災害において、アートを通じた復興支援活動を行う。



[制作メンバー(学生)]

アプリ開発、アニメーション：小濱行秀、濱田輝／企画：佐竹茉莉花、鈴木唯央／脚本：鈴木唯央／キャラクターデザイン：水野理咲子／モデリング：谷口智哉、深木大樹、水野理咲子／サウンド：前田桃／UI/UX制作：佐竹茉莉花、田邊拓真／声優：田邊拓真、谷口智哉、水野理咲子、田中繪、原健二／記録：宮田郁

協力：西村政俊(日ノ目スタチオ代表)、九州大学芸術工学部メディアデザインコース

監修：知足美加子(DIDI教員)、原健二(九州大学大学院芸術工学研究院メディアデザイン部門教授)



右から《矜羯羅童子》《制吒迦童子》

「半農半アート」を基盤とした地域づくりの仕組み

農ある暮らしは稼ぎだけではなく、自然を基盤とした文化を生み出します。現代社会は都市生活を尺度の中心にした価値が基盤になっており、この考え方が普及する中で、農の持つその価値が農村社会でさえも見失われがちです。農ある暮らしを広く伝えるためにはその理解に基づく表現が必要であり、感性に訴えかけるアートにはその役割が期待できます。課題が山積する中山間地域等の農村社会において、芸術活動を地域の文脈に即して導入する「農とアート」のライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりや、農業ボランティアの新しい仕組みのモデルを形成・提案します。

今年度の活動

半農半アート研究会

第6回「農×アート」現場からの報告～宮崎県西臼杵地域を例に～
6月21日(水)

2021年度から研究会を重ねる中で、農山漁村において、芸術活動を地域の文脈に即して導入していくことが包摂的地域づくりの一助となるのではないかということが見出されてきました。2023年3月には宮崎県西臼杵地方(高千穂町、五ヶ瀬町)を視察し、そこから見えてきたアーティストの役割、また彼らの存在や活動によって農村の人々が得た「気づき」や「視点」を軸に、農村×アートの相互作用や、これからの関わり方について考えました。[第1回～第5回は2021年度～2022年度に実施]

参加者:22名 場所:Zoomオンライン
時間:19:00～20:30 参加費:無料
ゲストスピーカー:藤木哲朗(日向時間舎代表・写真家)
オブザーバー:小森耕太(認定NPO法人山村塾理事長)、武田力(演出家・民俗芸能アーカイバー)
スピーカー:朝廣和夫・長津結一郎(DIDI教員)
進行・報告:森千鶴子(九州大学大学院芸術工学研究院学術研究員)

第4回半農半アートフォーラム「農とアートがひらくコミュニティ」 2024年2月10日(土)

「アート×農」に関する議論を活性化してきました。今回のフォーラムでは、九州大学が関わる実践や、九州各地の事例調査などを踏まえ、「アート」と「農」、それぞれの領域で議論されていることや、民俗芸能の継承、アートプロジェクトの現場での報告などから、「農とアートがひらくコミュニティ」について考えました。



テーブルごとに移動しながら、ディスカッションをしている様子

参加者:26名 場所:九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階
時間:14:00～16:30 参加費:無料
ゲストスピーカー:松崎宏史(株式会社Studio Kura代表・美術家)、安倍智子(農民芸術家)
オブザーバー:野村久子(九州大学大学院農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター准教授「農業資源経済学」)、武田力(演出家・民俗芸能アーカイバー)
スピーカー:廣政恭明(九州大学大学院農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター准教授「生物化学」)、森千鶴子(九州大学大学院芸術工学研究院学術研究員)
進行・報告:朝廣和夫・長津結一郎(DIDI教員)
主催:九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ
共催:九州大学大学院農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター
助成:九州大学令和4年度人系学際融合プログラム030「半農半アート」のライフスタイルを通じた未来の農村社会デザイン」

担当教員



朝廣 和夫 あさひろ かずお
九州大学大学院芸術工学研究院環境デザイン部門教授、博士(芸術工学)。専門は緑地保全学。九州芸術工科大学環境設計学科、大学院卒業。里地・里山保全の教育研究に従事。書籍『よみがえれ里山・里地・里海』などを共著。「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」を公開。



長津 結一郎 ながつ ゆういちろう
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門准教授、博士(学術・東京藝術大学)。専門はアーツマネジメント、文化政策。芸術活動を通じて新たな関係性が生まれる場に伴走/伴奏しながら、研究や実践活動を行う。著書に『舞台の上の障害者境界から生まれる表現』(単著。九州大学出版会、2018年)など。

救急のしくみのデザイン

近年、救急車の出動件数が増加しており、救急搬送が必要な患者のもとに到着するまで時間がかかることが社会的な課題となっています。福岡市の救急車利用の問題を考えるためには、仕組み・ルールのアプローチ、数理・情報デザインのアプローチ、啓蒙啓発のコミュニケーションデザインのアプローチが必要です。本研究プロジェクトでは福岡市消防局、九州大学未来社会デザイン統括本部と合同で調査を行い、それらにより問題構造やその背景を考え、安易な解決アイデアではないコミュニケーション形成としての方法を考えていきます。未来構想デザインコースの授業「デザイン実装論・演習」と連携した事業です。

今年度の活動

福岡市の消防車利用の問題へのアプローチを探す 10月10日(火)～29日(日)

福岡市では、救急出動の増加により、現場到着時間が延伸しています。119番通報があれば必ず救急隊を出動させなければなりません。現場に到着すると真に必要なケースも少なくありません。救急隊の最適配置に向けたデータ分析の委託や、「#7119(救急安心センター事業)」の啓発などにも務めていますが、総合的なアプローチが必要です。救急出動のデータなども活用した救急需要の抑制策(行動変容)を検討できないか、仕組み・ルールのアプローチ、数理・情報デザインのアプローチ、啓蒙啓発のコミュニケーションデザインのアプローチから考えました。

まず、アプローチや方法論を増やすために以下のデザインエクササイズを行いました。

分析練習01「私たちは何を果たしたいのか?」

多目的トイレ、正門、公園、ビジネスホテル、道路上など、まちなかにはいろいろなところに様々なテキストがあります。ある範囲を決めてその中にあるすべてのテキストを抽出し分類する。意味不明な言葉や禁止事項のお願い、記号などをすべて拾い出し不明なものは調べ、なぜその張り書きや記号が必要なのかを分析しました。

分析練習02「私たちは何に基づいているのか?」

「婚姻制度廃止法」「週休4日法」「新たにプラスチックは生産してはいけないが、地球上にあるプラスチックはリサイクルしてよい法」「九州7県再配置法」など、デザインフィクションとして世界を創造し、記述し、また、思索を促すような問のような課題を考えてもらいました。

分析練習03「私たちは何を知らないか?」

「あなたは男ですか女ですか? 1～10でお答えください」などを参考に、聞き方や問いの立て方など、これまでのアンケートのような質問ではなく、未知や本質に切り込んでいく質問の一つを考えてもらいました。それを相互に匿名で聞き合い、分析・解釈しました。

分析練習04「私たちは何を信じるか?」

コロナの感染者数のグラフにまったく異なる情報(自分でネットや文献から調べてもらう)を重ね合わせて、グラフを書いてもらいました。関係のない2つの情報を同じグラフに掲載するだけで、私たちは解釈をしたり、意味をつくったりすることになります。

このような思考や観察のエクササイズをしたあと、様々なデザインアプローチにより、問題の要素を右図のように分類しました。

これらの分析を基に、今後は、要素からの分析と全体からの統合により救急車の問題を考え、提言につなげていきます。

参加者:27名 場所:九州大学大橋キャンパス、ほか福岡市内各所

協力団体

福岡市消防局 : 尾方 義人 おがた よしと
: →p.26参照



救急に関する問題を分類した図

イミグレーション・デザイン

本プロジェクトでは、福岡出入国在留管理局、福岡国際空港株式会社と連携し、デザインや社会学の方法論の観点から、空港における出入国管理の仕組みや在留支援の仕組みを考え、解きほぐし、問題の在り処を考えていきます。

Civic Design Lab

今年度の活動

よるごはん meeting Season.3

7月19日(水)、8月2日(水)、9日(水)、16日(水)、23日(水)、30日(水)

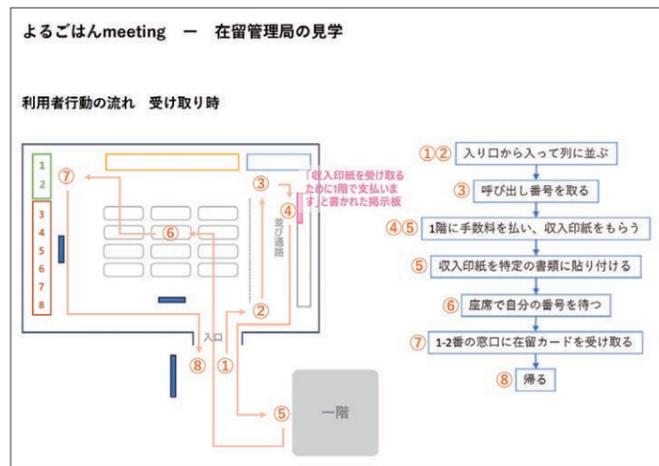
福岡で暮らす外国人労働者や留学生が集まり、出入国管理に関する施設を実際に見学し、当事者の視点からより利用しやすくするアイデアを出し合う多国間交流イベントです。留学で日本に来た学生も参加しており、芸術工学府・大学院生の高榕さんは、福岡空港や福岡出入国在留管理局を見学して課題を整理しました (p.9参照)。

場所：Fukuoka Growth Next 2階 時間：18:00~22:00
主催：一般社団法人 YOU MAKE IT 後援：福岡市 協力：福岡出入国在留管理局

「よるごはん meeting Season.3」の案内チラシ



※図版は高さんが整理した資料「行為との関係から見た空港情報システムのインクルーシブ性を高める研究(福岡空港外国人入国における情報システムの排除感の除去の為の表現形式の研究) 福岡国際空港及び福岡出入国在留管理局の見学に基づく調査結果発表」の一部より抜粋

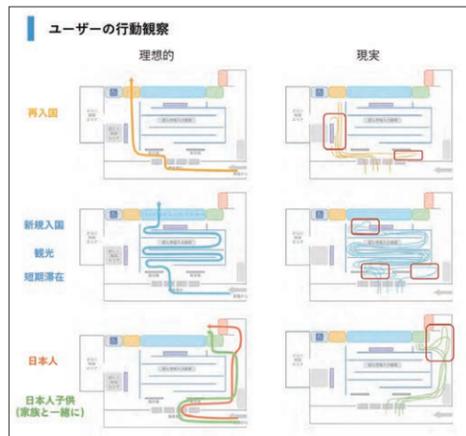


福岡出入国在留管理局における利用者の行動の流れを分析したもの



矢印、枠線の形状が統一されていない
ほとんどのサインは貼り紙の形式を使っていて、臨時設置のような感じがある

福岡国際空港入国審査エリアを見学し、課題を分析したもの



福岡国際空港入国審査エリアにおける利用者の行動の流れを分析したもの

協力団体

出入国在留管理庁福岡出入国在留管理局
福岡国際空港株式会社
一般社団法人 YOU MAKE IT

担当教員

尾方 義人 おがたよしと
→p.26参照

谷 正和 たにまさかず

九州大学名誉教授、元大学院芸術工学研究院教授、未来デザイン学センター長。専門は環境人類学。パングラデシュにおける地下水砒素汚染問題解決、パングラデシュ・テクナフ半島の森林破壊、ロヒンギャ難民のホスト社会などの研究調査を行っている。



多様性に応えるピクトグラムのデザイン

多様な人、多様なメディアが混在する現代社会において、ピクトグラムには、標準的な人やメディアへの最適化を目標とする「標準化」では解決できない課題が存在します。本プロジェクトでは多様性を包摂するスケール(調整)型の提案を目的に、標準化以前の歴史リソースを調査し、デザイン試作、人を対象とした調査を実施しています。

Civic Design Lab

今年度の活動

米国での歴史的リソース調査

標準化以前のピクトグラムの多様な在り方を示すデザイン資源として、両大戦間期に北米で制作されたピクトグラム群に着目し、その調査としてニューヨークを訪問しました。まずクーパー・ヒューイット・デザイン博物館で開催されていたピクトグラムの展覧会「Give me a sign: the language of symbols」を視察。同博物館が収蔵する工業デザイナー、ヘンリー・ドレイファスのシンボルアーカイブを対象に、教育的方針を前面に打ち出した問題提起型の展示が参考になりました(図1)。また企画責任者のキュレーター、Emily Orr氏とも意見交換を行いました。

次に、1930年代から40年代に北米で制作されたピクトグラムの資料調査で、ニューヨーク公共図書館とコロンビア大学図書館貴重図書室を利用しました。また、1930年代のピクトグラムを調査しているニューヨーク在住の研究者 Jason Forest氏に面会し、多数の資料を閲覧しました。その知見を基に標準型からカートゥン(漫画的)様式までのピクトグラムをシームレスに統合するスケール(調整)型デザインの可能性を探っています。

協力：Emily Orr(クーパー・ヒューイット・デザイン博物館キュレーター)、Jason Forest(インフォグラフィクス研究者)



図1)「Give me a sign: the language of symbols」展、クーパー・ヒューイット・デザイン博物館

人型ピクトグラムの「理解」・「好み」と適応社会行動の尺度関連

米国での歴史リソース調査を基に、標準化以前のピクトグラムのグラフィックエレメントを抽出し、標準的なピクトグラム~カートゥン様式の人型ピクトグラム7種類に対して、「理解」度と「好み」を計測する調査を、成人知的障害者30名を対象に実施しました。全体の傾向として、カートゥン様式の人型ピクトグラムが「理解」度も「好み」も上位の結果となりました(図2)。また、調査参加者それぞれの適応(社会)行動尺度得点を用いて、対人関係・社会性・受容言語・表出言語などのパターンと、「理解」度と「好み」の関連について分析を進めました。

協力：社会福祉法人 JOY 明日への息吹、社会福祉法人 野の花学園

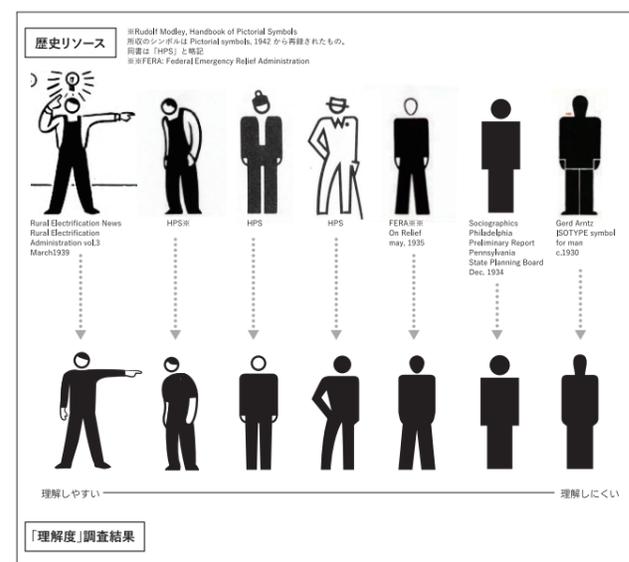


図2)知的障害者に理解度の高いピクトグラムと各ピクトグラムの歴史リソース

担当教員



伊原 久裕 いはらひさやす

九州大学大学院芸術工学研究院教授、博士(芸術工学)。アイソタイプ (ISOTYPE) 研究をはじめとする情報デザイン、ピクトグラム、タイポグラフィ等に関する歴史研究に従事。並行して、都市サインやバス停サイン、展覧会のコミュニケーションデザインなどの制作活動を行っている。



工藤 真生 くどうまお

九州大学大学院芸術工学研究院助教、博士(デザイン学)。教育施設におけるサイン計画に関する研究、知的障害者を対象にした、案内用図記号の意味理解教育、読み書きがしやすい書体など、ピクトグラム及びサインのユニバーサルデザイン研究に従事。障害がある人と共にデザインをつくるボトムアップ型のデザイン手法、調査方法を模索し、活動を行っている。

ジェンダー／LGBTsのデザイン

世界経済フォーラムの「ジェンダーギャップ指数」ランキングの低迷に見られるように、日本では、ジェンダーの不均衡が是正されない状況が続いています。LGBTsについても、認知が広まったとはいえ、差別的な発言が後を絶ちません。本研究プロジェクトでは各自治体と連携して、ジェンダーの新しい啓発の手法の開発や組織間連携の仕組みを検討しています。

今年度の活動

男女共同参画ふちフェスタ ※自治体との連携事業 → p.10参照

展示「ルールとジェンダー」

6月17日(土)～30日(金)

私たちはふだんの何気ない生活の中でも、毎日、様々なルールに影響を受けて生きています。九州大学芸術工学部未来構想デザインコースの授業「デザイン設計論・演習」の課題として受講生21名により制作されたパネルを通して、身近な話題から「ルールとジェンダー」を見つめる展示を、福岡県筑紫野市との連携で実施しました。

学生たちは、映画館の「レディースデー」や飲食店の「レディースセット」といったマーケティング、また、職業における男女の比率、スポーツにおける男女の扱いの違いなど、様々な「ルール」を切り口として、「なぜそのようなルールが作られたのか?」という歴史的な経緯などを深掘りして調査し、展示パネルにまとめました。来場者の感想として「まだまだ社会にはいろいろな縛りがあるけれど、属性でひと括りにされず、個人が大切にされる社会が望まれます」「今回の展示を見て、考え方が変わりました」「いま見ているものが違って見えることが、これまでの価値観の『ワク』を外すことにつながるかもしれない」といったコメントが見られました。

場所：筑紫野市生涯学習センター 1階多目的ホール 時間：9:00～22:00(月曜日休館、30日のみ15:00まで) 入場料：無料 主催：筑紫野市、男女共同参画プラザ活動登録団体連絡会

講演会「ジェンダーって何?身近な問題に気づく力」

6月24日(土)

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会に向けたピクトグラム制作プロジェクトに参画した経験を基に、ピクトグラムとジェンダーに関する調査から見てきたジェンダーや社会に対しての気づきについて、尾方教授が講演を行いました。20代から70代の幅広い世代の参加があり、「自分が今まで知らなかったことを興味深く知ることができた」「今の世の中をきちんと見すえることができた」といった感想が聞かれました。

参加者：22名 場所：筑紫野市生涯学習センター 3階視聴覚室 時間：14:00～16:00 参加費：無料 講師：尾方義人(DIDI教員)

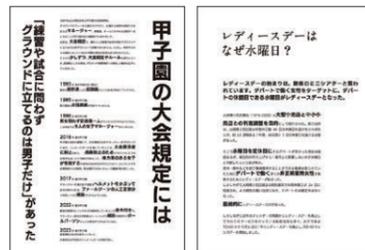
第3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」

公開二次審査

10月28日(土)

応募のあった143作品(「社会包摂とデザインB」[p.29]の受講者から98点出品。ほか、一般公募など)から一次審査で15作品が選ばれ、公開二次審査で最優秀賞1作品、優秀賞2作品が決まりました。※詳細はp.11参照

審査員：近藤美由紀(福岡市男女共同参画推進センター・アミカス館長)、山口正裕(福岡市市民局人権部長)、小林美香(写真研究者)、結城円(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)、工藤真生(DIDI教員)
場所：福岡市男女共同参画推進センター・アミカス(ハイブリッド開催) 時間：14:00～16:30
主催：福岡市、九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ



上)展示会場の様子 下)展示パネルより

※当展示の図録を、右記の二次元コードからご覧いただけます



担当教員

尾方 義人
おがた よしと

九州大学大学院芸術工学研究院教授、博士(工学・大阪大学)、デザイナー。専門学術領域はデザイン学・デザイン方法論・デザイン史。専門実践領域は工業デザイン・グラフィックデザイン・インテリアデザイン。



中村 美亜 なかむら みあ

→p.20参照

教育

Education

[授業] 社会包摂とデザインA

[授業] 社会包摂とデザインB

[授業] 身体表現特講演習 文化事業マネジメント特講

[授業] スタジオプロジェクト

[授業] コース融合プロジェクトA・B

[授業] 創造農村デザイン演習 創造農村デザイン応用演習

[授業] デザイン・シビック

[授業] 福祉人間工学

[高校生対象] 高校生とのジェンダー研究

授業 社会包摂とデザインA

担当教員：尾方 義人、中村 美亜、田北 雅裕、須長 正治、村木 里志、田上 健一、尾本 章、
長津 結一郎
学外ゲスト：原 真理子

「社会包摂とデザインA」では、「包摂性」を軸に、社会包摂の背景にある多様な課題について様々な視点を身に付けるために、芸術工学研究院の教員に加え、部内外の様々な分野の専門家にオムニバス形式で講義をしていただきました。具体的には、インクルーシブやウェルビーイングとは何なのか？ 共創的なアート実践が認知症の人や高齢者にどのように影響するのか？ 里親家庭で暮らす子どもにどのようなデザインが必要なのか？ 色覚、動作、聴覚といった人間の身体に関する多様性をどのように包摂するのか？ といった様々な課題を実際の事例やデータを基にして理解し、デザインをより多面的なものに変容させていく可能性を考えました。

多くの担当講師がZoomチャットを用いて質問を受け付けながら講義を進め、受講者と議論を交わしました。受講者には、「社会包摂デザインとして捉えるべきだが、まだ情報やアプローチが十分ではなさそうなこと」に関するアイデアをビデオレポートにまとめ、相互に評価してもらいました。

受講者の多くが、自分自身の身近な経験や観察、関心から想像力を膨らませ、他者の視点をすることで新たなアプローチを得ていました。特に、新型コロナウイルス感染症が本格的に収束したことで、昨年よりも学生生活の中で身近に感じる関心を挙げる人が多かったように感じられました。

デザイン理論家のホルスト・リッテルは、線形的な因果関係では飼い慣らすことのできない「厄介な問題」にこそ目を向けるべきだと言いました。簡単に正しい方向に解決ができそうな問題ではなく、手を動かしながらよりましな解決策を探り出すしかないような、そうした問題を見つけて向き合っていく。こうした経験を通じて、現代社会に山積する「社会包摂」の課題の大きさや広さに思いを馳せることができたのではないのでしょうか。

受講者が挙げた「社会包摂デザイン」の課題の例(抜粋)

- ◆より包摂的な運転免許証の取得
- ◆排除アートは社会包摂デザインになりえるか
- ◆よりインクルーシブな文化施設(図書館や博物館)
- ◆喫煙(分煙)から考える社会包摂
- ◆地震発生時の外国人・障害者支援
- ◆駅構内アナウンス
- ◆公共トイレとジェンダー
- ◆ゲームから見た多様性と平等
- ◆若者の恋愛離れと新たな出会い方
- ◆ブラック校則
- ◆生理休暇
- ◆見えない障害
- ◆ワンオペママのSOS
- ◆地方と都心の学力格差



講義スライドの一部より

回	テーマ	担当講師
1	ユニバーサルデザイン	尾方 義人 (九州大学大学院芸術工学研究院)
2	認知症とアート	中村 美亜 (九州大学大学院芸術工学研究院)
3	ノルウェーにおける高齢者ケア	原 真理子 (インランドノルウェー応用科学大学)
4	里親家庭	田北 雅裕 (九州大学大学院芸術工学研究院)
5	色覚多様性	須長 正治 (九州大学大学院芸術工学研究院)
6	人間の形態と動作の多様性	村木 里志 (九州大学大学院芸術工学研究院)
7	社会の課題を解決する建築をデザインする	田上 健一 (九州大学大学院芸術工学研究院)
8	聴覚障害	尾本 章・長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者：高年次基幹教育(全学部、2年生以上) 受講人数：307名(最終課題の提出人数) 日程：2023年度春学期

授業 社会包摂とデザインB

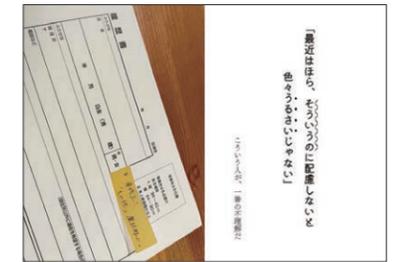
担当教員：中村 美亜、尾方 義人、白水 祐樹、田中 瑛、伊原 久裕
学外ゲスト：小林 美香、兼子 裕代、北 恭子

「社会包摂とデザインB」では、「A」で習得した視点を踏まえて、「多様性」をどのように表現し、価値観を揺さぶるのかという実践的な側面について、表現に携わる実務家や教員による講義や演習を通じて考えました。社会的な課題に向き合うためには、啓発を通じて常識的とされる偏見を自覚するだけでなく、価値観が揺さぶられ、意識が変わるような経験が必要です。表現者としてそのような経験をどのように生み出せるのかは「社会包摂デザイン」を考える上で重要なものだと思います。

この授業では、福岡市男女共同参画推進センター・アミカスと共同で実施している「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」(p.11 参照)への出品を念頭に置き、言葉と写真を組み合わせた表現により、ジェンダーの課題に働きかけることを具体的な目標としています。そこで、文学作品、写真やコピーといった広告表現、ジャーナリズムにおける表象の問題や技術について基礎から学びました。写真を撮影する際に何を意識するのか？ どのような心構えで撮影するのか？ どのように言葉を用いて多様な物事を捉えるのか？ どのようにメディアを活用するのか？ こうした問いを積み重ねることで、単に規範的なメッセージを明快に伝えるのではなく、深い思慮や価値観の変容を触発するような、そして、多種多様な意味解釈を喚起するような表現を探っていきました。

最終課題では、多くの意欲的な作品が提出されました。その多くが、マジョリティの視点で理解した気になりやすい、マイノリティの日常の違和感やモヤモヤをじわじわと浮かび上がらせるものでした。こうした機会をさらに積み重ねていくことで、少しずつ社会を変革できるという手応えを感じさせる授業になりました。

「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテスト」に向けた最終課題で提出された作品のうち、コンテスト一次審査通過のもの



(上から)徳田加鈴さん/山田かおりさん/岡村咲希さん/三好恵梨香さん

回	テーマ	担当講師
1	ジェンダー	中村 美亜 (九州大学大学院芸術工学研究院)
2	文学作品から学ぶ社会課題に対する表現	尾方 義人・白水 祐樹 (九州大学大学院芸術工学研究院)
3	表現論-ジェンダー表現とメディアの関係から	小林 美香 (写真研究者)
4	ジャーナリズムと社会包摂	田中 瑛 (九州大学大学院芸術工学研究院)
5	社会包摂とグラフィックデザイン	伊原 久裕 (九州大学大学院芸術工学研究院)
6	ジェンダーの写真論	兼子 裕代 (写真家)
7	社会課題に向かうコピーライティング	北 恭子 (電通コピーライター)
8	まとめ	尾方 義人 (九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者：高年次基幹教育(全学部、2年生以上) 受講人数：241名 日程：2023年度夏学期

授業 身体表現特講演習〈学部〉 文化事業マネジメント特講〈学府〉

担当教員：長津 結一郎、田中 瑛

学外ゲスト：神本 秀爾、城野 敬志、大和 佐智子、神里 雄大

対話的な演劇の鑑賞体験を構成し、社会的な課題を考える機会を提供する。このことは文化政策を考える上で重要な課題だと言えます。そこで、福岡県久留米市にある久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」に参画する授業を実施しました。

学外から参加した高校生や大学生とともに、移民（イミグレーション）を題材とする神里雄大さん作の演劇『イミグレ怪談』を実際に鑑賞し、対話をしていきました。アイスブレイクで身体を動かし、参加者の間に親密な関係を築く。グループに分かれて、外国人人口の多い久留米市の課題を話し合い、提言を発表する。このようにして、年齢やジェンダーを越えて発言しやすい雰囲気をつくりながら、人類学を専門とする研究者や日本語学校で外国人と接する講師など、ゲストスピーカーの話

を聞き、国と国とを隔てる境界線について多角的に理解を深めていきました。

同演劇作は、イミグレーションをめぐる経験の語りをもとに、コミカルな場面とシリアスな場面、現実と虚構が絶えず切り替わるという複雑な内容でした。鑑賞が終わり



再び設けた対話の時間では、どのように解釈すれば良いのか戸惑いながらも、参加者は自分自身の解釈を提示していきました。また、「誰が何を言ったか」でさえ、人によって多様な解釈が生まれていくことも体感しました。

最後は授業の受講者だけで集まり、以上の「新しい演劇鑑賞教室」での経験を、鑑賞体験を仕掛ける側の視点で振り返り、架空の演劇を題材にして、対話や鑑賞を盛り上げるために何が必要なのかを考えてもらいました。

回	テーマ	担当講師
1	イントロダクション	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
2	ワークショップ「境界線上から見たしてみる」	神本 秀爾 (久留米大学文学部准教授)
3・4	プレクチャー「劇場で考える～国際／交流～」	城野 敬志 (art space tetra キュレーター) 大和 佐智子 (専修学校久留米ゼミナール日本語学科主任教員) 長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
5・6	「イミグレ怪談」鑑賞と対話	神里 雄大 (劇作家・舞台演出家) 長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
7	鑑賞体験の振り返り	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
8	対話や鑑賞をデザインする	田中 瑛 (九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者：芸術工学部・芸術工学部全専攻 受講人数：9名 日程：2023年度夏学期 連携：久留米シティプラザ

授業 スタジオプロジェクト (聴覚障害のある人にとってのコンサートのあり方を考える)

担当教員：尾本章、長津 結一郎

学外ゲスト：鈴木 玲雄、Sasa/Marie、藤井 成清 (パナソニック株式会社)

アシスタント：眞崎 一美 (九州大学大学院芸術工学研究院テクニカルスタッフ)

近年、多様な人たちが芸術の場へ参加、鑑賞できる環境を整えていこうという動きが、公立文化施設を中心に広がっています。このことを音楽コンサートなどのイベントにフォーカスを当て、様々な視点からコンサートの在り方を考え、企画として提案することで、単なる情報保障を超えた“体験の共有”を試みました。

企画を考える際には、聴覚に障害のある方々にたびたび来ていただき、当事者としての率直な意見をうかがい

ながら、一緒に模索する作業を繰り返して行いました。その中で、「きこえ」の差による経験が音楽に対する固有の意識の差を生み出していることに気づき、その差をどのように扱うかが課題となる場面もありました。今後、多様な社会の在り方を考え実践していく学びや研究につながることを期待します。



光と身体表現、重低音による振動によってライブ感を共有する試み

2023年4月から2024年2月まで発展的に企画検討を実施 担当講師：長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
春学期：企画のプロトタイプを検討
夏学期：春学期のプロトタイプをブラッシュアップ
秋・冬学期：最終プロトタイプの制作および公開発表と講評

対象者：芸術工学部修士1年 受講人数：春学期32名、夏学期15名、秋学期14名、冬学期14名
日程：2023年度通年 協力：キコエナイ×キコエル発展事業委員会、一般財団法人たんぼの家

授業 コース融合プロジェクトA・B〈学部〉 (聴覚障害のある人にとっての「音楽」を考える)

担当教員：長津 結一郎、尾本章

学外ゲスト：牧原 依里、リシェツキ 多幸、鈴木 玲雄、九州ろう学生懇談会メンバーほか

アシスタント：眞崎 一美 (九州大学大学院芸術工学研究院テクニカルスタッフ)

聴覚障害者をめぐる社会的背景や学術的状况を把握し、当事者にとっての音楽体験を深く考察しながら、「きこえ」の違いに関わらず音楽を共有できる仕組みを考案し、最終的にはワークショップやインスタレーションなどの方法で提示することを目指しました。

所属コースが異なる学生が、これまでに身に付けた専門分野の知識やスキルを用いて、共同で課題に取り組むことで、各デザイン領域の枠を越えた新しい社会の仕組みを創出する経験の機会となっています。

回	テーマ	担当講師
1	アートと社会包摂についての概論	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
2	聴覚障害者にとっての音楽を考える	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院)
3	聴覚障害と音楽：当事者の声を聞く	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院) 牧原 依里 (映画『LISTEN - リッスン -』監督) 九州ろう学生懇談会メンバーほか
4-7	作品制作と講評	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院) リシェツキ 多幸 (九州交響楽団) 九州ろう学生懇談会メンバーほか
8	発表と講評	長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院) 鈴木 玲雄 (福岡ろう劇団博多) リシェツキ 多幸 (九州交響楽団) 九州ろう学生懇談会メンバーほか



発表の様子

対象者：芸術工学部全コース3年生
受講人数：24名
日程：2023年度秋学期

授業 創造農村デザイン演習〈学部〉 創造農村デザイン応用演習〈学府〉

担当教員：朝廣 和夫、長津 結一郎、森 千鶴子、野村 久子、廣政 恭明
学外ゲスト：小森 耕太、石田 絵里香

中山間地域などの農村社会には、豊かな自然と地域が育んできた文化がある一方で、少子高齢化や過疎化を含む様々な課題が山積しています。そのような中、農とアートのあるライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりを実践している地域を対象とし、学生が主体的に農村の自然、文化、その課題に触れ、包摂的社会に関する具体

的な取り組みの在り方を学ぶ臨時授業科目として開設しました。

現地合宿では、農作業と芸術活動の実習を通して、農村文化を継承・伝達するための仕組みを学生の目線で考えました。



農村文化に触れ、そこにある課題を共有



笠原東交流センター「えがおの森」でのワークショップの様子



八女市黒木町笠原地区での農作業の様子

回	テーマ	担当
1	オリエンテーション、イントロダクション	朝廣 和夫・長津 結一郎 (九州大学大学院芸術工学研究院) 小森 耕太 (NPO法人山村塾)
2	NPO法人山村塾での合宿研修 (農とアートのフィールドワーク)	朝廣 和夫・長津 結一郎・森 千鶴子 (九州大学大学院芸術工学研究院) 野村 久子・廣政 恭明 (九州大学大学院農学研究院) 小森 耕太 (NPO法人山村塾)・石田 絵里香 (関西大学大学院)

対象者：学部2年以上、農学部、大学院芸術工学府全コース、大学院生物資源環境科学府 受講人数：17名

日程：2023年度夏学期(9月18日、18日～20日)

助成：九州大学令和4年度人系学際融合プログラム030『「半農半アート」のライフスタイルを通じた未来の農村社会デザイン』

授業 デザイン・シビック

担当教員：田中 瑛、尾方 義人

学外ゲスト：黒田 加那

包摂型社会の実現には誰もが意思決定に参加できる環境が必要であり、デザイナーにも他者の語りに耳を傾け、広く表現する力量が問われています。昨年2022年度は対話のための環境を設計することを目指しましたが、今年2023年度は取材を通じて相手の本音を引き出し、寄り添うことを目指して新聞記事を書いてもらいました。

新聞や記事といったときに「中立」や「客観性」を連想する方も多いかもしれませんが、良質なジャーナリズムには、語りを通じて他者の見ている世界を知り、自分自身の立場から相手に伝える……そのような充実したプロセスが必要不可欠となります。そして、実際に取材を試みるに当たり、西日本新聞で「しゃべROOM」という企画を立ち上げた黒田加那記者をゲスト講師としてお招きしました。黒田記者はご自身の経験も交えながら、一人の生活者として様々な人々と関わり、会話をしていく姿勢が記者にも求められるのだと話してくれました。

後半では実際に課題に取り組み、短い授業期間の間で、自分自身の関心と社会との接点を見出し、話を聞きに行くということを行いました。トレーディングカードゲーム(TCG)や陶磁器に熱中する人々にその理由を尋ねるような文化的な内容の記事から、日本語教室の利用経験やLGBTQの中国人留学生など国際的な視野に基づく記事に至るまで、その関心は多岐にわたるものでした。他方で、身近にある事柄にどのような社会との接点を見出すのか、些細に見える不和やモヤモヤをどのように重要な問題として提示するのか……受講者にとってはこうした厄介な問題を感じる経験にもなったかもしれません。



最後に記事を相互批評する機会を設け、疑問を投げかけたり、文章には起こせなかったリアルな情景を語ったりしながら理解を深めていきました。

受講者が自ら設定した取材テーマ

- ◆母子手帳という思い出を子どもへ
- ◆在留外国人労働者が日本で感じていること
- ◆LGBTQの中国人大学生が直面する現実
- ◆時代の変化に応じたおもちゃ屋の在り方
- ◆福岡の建築保全団体による啓発活動
- ◆外国人留学生にとっての日本語教室
- ◆クリエイターは画像生成AIをどう見たか
- ◆成人にとってのTCG(トレーディングカードゲーム)
- ◆陶磁器を日常生活に取り入れる
- ◆未来の紙製品の可能性

回	テーマ
1	ガイダンス——主観的事実を知ること
2	対話・取材とは何か?——聞くこと、表現することの多様性
3	メディア・ワークショップ/設計——語りを生み出す環境のデザイン
4	ジャーナリズムの技術と実践——現場の記者との対話(ゲスト講師:西日本新聞社・黒田 加那)
5	取材の実践①/情報収集
6	取材の実践②/インタビュー
7	記事の執筆と相互論評——読解するというコミュニケーション
8	まとめ

対象者：芸術工学府 受講人数：9名 日程：2023年度春学期

授業 福祉人間工学

担当教員：村木 里志、Loh Ping Yeap

本授業では主に子ども、妊婦、高齢者、身体障害者の特性とそれによって生じる生活面での不自由について理解します。そして、それぞれの特性に応じたモノや環境を設計するための人間工学的知識を身に付けます。

授業の中では疑似体験の演習を設けています。演習の目的は、(1) 実際に当事者の不自由を体験すること、(2) 福祉用具や移動円滑化の基準を体験すること、(3) 不自由はモノや生活環境によって左右されることを理解する



車いすや疑似体験セット装着で演習を行っている様子

■体験内容

- ① 高齢者疑似体験 (疑似体験セットを装着し、生活動作の不自由を体験)
- ② 妊婦疑似体験 (疑似体験セットを装着し、妊娠後期時のお腹のふくらみと生活動作の不自由を体験)
- ③ 車いす走行と移動円滑化 (通路幅・ドアの開閉方式の違いによる通行しやすさ、多目的トイレの利用、スロープ・段差昇降およびその介助)
- ④ 車いすスポーツ体験 (車いすバスケットボール、車いすバドミントン)
- ⑤ 高性能車いす (車いすの各種機能の紹介)
- ⑥ 介護用電動ベッド (特殊寝台) の利用 (背上げ機能の利用、介助動作)
- ⑦ 視覚障害者疑似体験 (白杖と誘導ブロックを用いて、目的地へ移動)

ことです。これらの目的を踏まえて、下記の体験を企画しました。

受講学生は各体験に対して与えられた課題だけでなく、自主的に新たな課題を考えたり、教員・アシスタントに質問したりするなど前向きに取り組んでいました。その後の講義の授業においても教員への質問が増え、当演習が学生の関心をより深めていることがうかがえました。

対象者：インダストリアルデザインコース2年 受講人数：約45名+アシスタント役として10名(博士・修士・学部4年生) 日程：2023年度夏学期

高校生対象 高校生とのジェンダー研究

担当教員：尾方 義人、伊原 久裕

近年、ジェンダー／LGBTsに関して、若い世代を中心に充実した知識や考えが浸透しつつあるようです。そうした中で、「デザインにおけるジェンダー表現」について考えたり、自らデザインを行ったりしている県外の高校生らの活動について、DIDI教員が依頼に応じて助言を行いました。

11月8日(水) 14:00~15:00 Zoom オンライン

長崎県立長崎東高等学校の生徒3名から尾方教授へ、「長崎県のご当地キャラクターにおいて、ジェンダーを意識させるデザイン要素は何だと考えるか」という身近な話題からの質問や、「現在または今後、どの分野のデザインにジェンダーについての配慮が必要だと考えるか」「良いデザインの案やモチーフを見つけ出すコツは何だと考えるか」「私たちがデザインを制作する上で、どのようなことに注意すべきか」、さらに「デザインという分野において一番大切だと思うことは何か」といった根源的

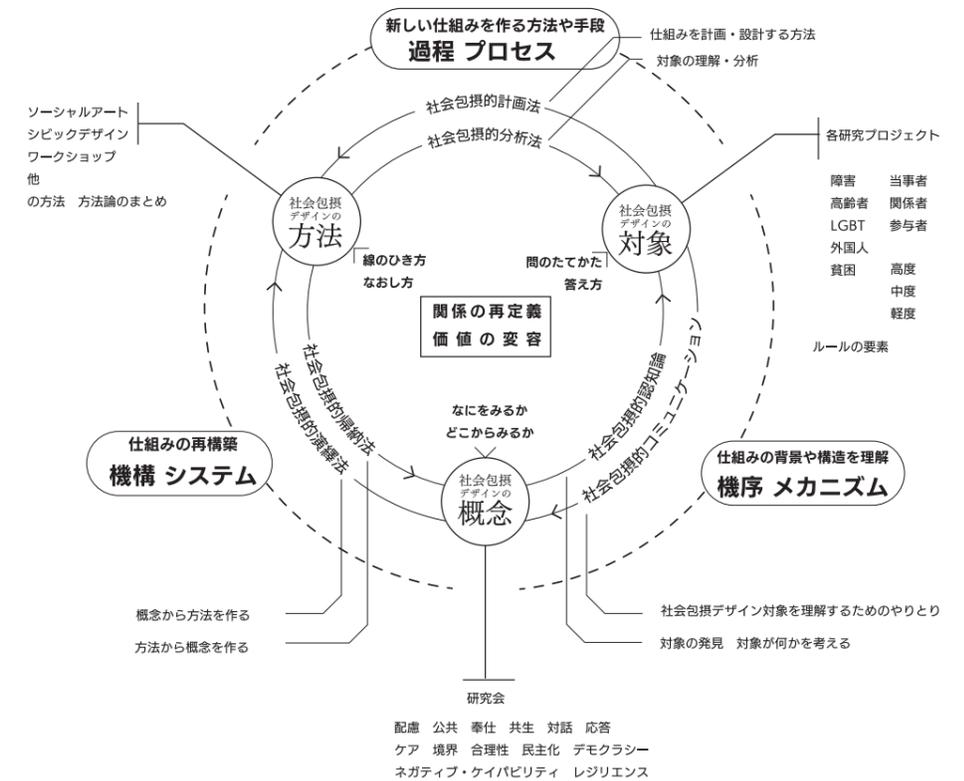
な質問がされました。尾方教授は、これまでDIDIでジェンダーに関する展示を多数実施してきた中での発見や気づいたことなどを基に、デザインの専門家の見地から助言を行いました。

12月8日(金) 10:00~11:00 Zoom オンライン

昨今、長野県の複数の高校で、美術部員などの生徒が校内のトイレのピクトグラムを自らデザインし実装する動きがあるそうです。そうした取り組みを地元紙である信濃毎日新聞の記者が詳しく取材しており、担当記者と伊原教授とでオンラインミーティングを行い、高校生らが実際にデザインを行う中で感じている課題である「男女の違いのわかりやすさと、性差の強調をなくすことのバランスを、どう取ったら良いのか」などのテーマについて意見を交わしました。後日、高校生らの取り組みとともに、伊原教授のコメントが信濃毎日新聞の特集記事(p.38参照)で掲載されました。

社会包摂デザインを考えるための道具

2021年度から2023年度で、DIDIの活動としておよそ50のプロジェクトや展示会・研究会を行い、さらに教育面では社会包摂関連の授業が大変多く行われ、単位数でいうと約2500単位数の履修がありました。こういった実績を踏まえ、社会包摂デザインの「対象」「方法」「概念」のアプローチでこれまでの整理したものが、この図です。



また、このような社会包摂デザインの活動を支援していくために、様々なコンテンツを道具として仮に以下のように整理しました。

デザインの方法ツール

スキットープロセスの可視化

デザインのプロセスはなぜ重要なのか、プロセスをいかに共有するか、共有すると何が良いのか、これらを考えるためのワークショップ手法の開発と共有 (p.6およびp.12参照)。

シビックデザインワークショップ

社会学の方法、デザインの方法を活用したワークショップや展示手法のマニュアル化・共有化 (p.12およびp.33参照)。

マイクロ・クレデンシャル

既存のカリキュラムマップとは異なる枠組みの授業群の構築。社会人や高校生などを含めた学内外への公開を2024年度に予定。

概念構築支援ツール

グレートブックス

社会包摂デザインに関する書籍群の情報化 (p.12参照)。

ディクショナリー

具体的な問題をコラムに記述し、そこから見出したルールなどを幅広く抽出 (p.13参照)。

クロノロジー

1.障害・ジェンダー・子ども・外国人・福祉・SDGs・人権などに関わる事項を一元的に年表化 (p.13参照)。

インデックス

社会学・哲学・経営学・デザイン学などから社会包摂デザインに関わる可能性のある概念 (p.13参照)。

この道具群を「社会包摂デザイン7 Pillars」と謳っていきます。

これからの社会包摂を進める(かもしれない)個人の力

松野 康臣 (DIDI 協力研究員)

DIDIのデザインシンクタンクに関わって3年が経ちました。当初、この現代的なテーマでもある社会包摂を、どのようにデザインとして社会に打ち出すのだろうと、期待と不安が入り混じった感情が芽生えたものです。しかし、これまで漫然と通過してきた「ものやことをつくるプロセス」を細部まで観察し直す機会となり、NPO人としてもデザイナーとしても、新たな気づきをもたらえる大切な時間となっています。この立場の違う二者間で共通する二つの発見を復習しながら、この取り組みを振り返ってみます。

一つ目の発見は「効率化の弊害」です。

様々なものやことを組み立てていく際、つくり手は目的や機能の見えないものから色や形などの見えるものまで様々な選択を組み合わせて進めます。そこには提案する側の人や、評価をする側の人もいて、コミュニケーションを交わしながら選択し進めていきますが、改めて観察してみると想像している以上に、効率化という物差しが無意識に重宝されています。そして、その状況を効率の良いスキームとして、慣習として前例を積み重ねています。結果、現場で起こるのは、「効率化を図るには、マイノリティは見えていない」という体裁の連鎖です。NPO人としては、この「見えていない」の部分で表されているマイノリティに対する向き合い方にやるせなさを感じ、自分を含めた社会に対して言いようもない怒りを持ってしまいます。

次に、デザイナーとして見てみると、そのデザインプロセス上の分岐点で、自分なりのユニバーサルデザイン的な手法や経験としてのホスピタリティは用いていたのですが、そこに意識的な社会包摂デザインの視点はなく、なんとなくこれまでの成功体験をもとに進めていたという事実気づきました。プロセスをパターン化することで、デザイン自体の効率を図ることを無自覚に選択していたために、自分のデザインの可能性を閉ざしてしまっていたようです。

このように、効率という経済性の高い物差しを正しいと信じてきた社会が、実は大切な何かを排除しながら進んできたということを認知できる機会となっています。

二つ目の発見は「個人が持っている可能性」です。

先進的な社会包摂デザインの事例を演劇の形でプロセスシーンを再現し、観客(参加者)がデザイナー当事者になるというロールプレイ型ワークショップを2023年3月に実施しました(p.6参照)。演劇は大切なシーンごとに立ち止まり、観客それぞれが「自分だったらどうす

るか?」を考えます。観客は、目の前のデザイナーが困難をクリアしていく姿を、台詞のやり取りや表情の変化を読み取りながら追体験していくのです。ここに大きな発見を感じました。慣習から脱出しようとする個人の強い思いが、少しずつ周りを巻き込み、これまでの当たり前を変えていくのです。NPOの最もシンプルな活動方法にも似ていて、個人という力を再認識できました。

また、困難をクリアするデザイナーは、デザインの知識だけでなく広い知識を持って対応していたことも大事なポイントでした。

田北雅裕さんのストーリーでは、福祉の専門家として、また、メディアの効果を語ることができるデザイナーとして、現場の課題を広く捉えることで、多くの賛同を得ることが可能となっていました。羽野暁さんのストーリーでは、自身が行政的な課題を理解し解読することで、伝えたいことの精度を上げ、相手側からアイデアが出てくる関係までの信頼を得ていました。

どちらの例も、相手の立場に立って、相手との間に共通言語をつくり出すことで、新しいコミュニケーションが生まれ、これまでの当たり前と一緒に変えていくシーンは、感動的でした。また、何度失敗しても挑戦を続けていたことも大事なところでしょう。「強い思い」と「共通言語化」という二つの要素を持つことで、社会を変えられるという、ポジティブな可能性を感じるものとなりました。

今後DIDIが、改めて個人の力に着目して分析し、そのような個人を育てる教育につながっていければと考えます。実は、僕が一番勉強になっているんですけどね。



松野 康臣 うんのやすおみ

NPO法人九州コミュニティ研究所代表。1969年熊本生まれ。プロデューサー、ディレクター、デザイナー、現代美術作家。2004年に「デザインの最適化」をミッションとしてNPO法人九州コミュニティ研究所を設立。ほか、NPO法人アクションタウンラボ共同代表、SOL DESIGN INC. 代表取締役、文化庁文化的景観調査員、平戸市文化的景観推進委員会委員など。

多様な生物が関わり合う田畑を想像しながら

大澤 寅雄 (DIDI 協力研究員)

私は、文化政策の調査研究という仕事をしながら福岡県糸島市内で畑をやっている、肥料や農薬を使わずに野菜を育てることに挑戦しています。DIDIが始まった2021年から、それ以前よりも広い畑を借りて、2022年からはさらに田んぼも始めました。農という営みを通して、人間である私自身と、様々な動植物や微生物、土、水、天候などと向き合いながら、それらの関わり方である生態系の参与観察を実践しています。

初めてデザインシンクタンク研究会で松野康臣さんと出会ったときの自己紹介で、ご自身の仕事が「モノをデザインすることから、コトのデザイン、場のデザインへと移行してきた」と仰いました。デザインの対象を「モノ・コト・場」の3つに分ける考え方に新鮮さを覚えたと同時に、例えば農業という営みでは、^ほ鍬や^ま鎌というモノ、田植えや収穫というコト、田んぼや畑や市場という場の、それぞれにデザインの可能性があることに気づきました。

近代以降の工業型農業は、大規模な圃場を整備し、農機具の大型機械を開発し、化学肥料や農薬を使い、単一品種を栽培することで生産性や効率性を高めてきました。そのための農機具というモノ、農作業というコト、農場や農産物の流通の場がデザインされています。その一方で、生産性や効率性を阻害する動植物や微生物が結果的に排除される形で、近代農業の業態や業界が形成されており、土壌劣化、植生破壊、河川や地下水等の汚染、農地の耕起による温室効果ガス排出といった地球環境の持続可能性の脅威にもつながっています。そこで、可能な限り自然本来の多様性を生かし、動植物や微生物の力を借りながら共生していく農の在り方に、私を含めて多くの人が関心を寄せるようになってきました。

こうした農の在り方と、障害、貧困、性的指向・性自認、国籍などの理由で社会的に傷つきやすい立場に置かれている人たちを、排除するのではなく、尊重し、潜在能力を引き出しながら共生する包摂的な社会をつかっていくことは、社会の持続可能性を追求する上での相似形の課題であり、DIDIの問題意識と根底でつながっているのではないのでしょうか。

DIDIは包摂的な社会を実現するための実践を、デザインでアプローチしてきました。例えば、色覚の多様性に配慮した大学構内の案内図という「モノ」、認知症の高齢者と介護者の関係性を改善させるワークショップという「コト」、課題が山積する中山間地域等の農村社会での包摂型地域づくりという「場」など、近代以降の経

済的合理性からこぼれ落ちた課題に対し、目に見えるデザインの「結果」だけでなく「プロセス」での試行錯誤や葛藤やジレンマなどを共有したことが、私にとって重要でした。

今年度、3年目のデザインシンクタンク研究会では、福岡県内の3つの市の3名の行政職員(うち1人は行政職員から転職して現在は民間企業に勤務)に対するインタビュー調査の報告がありました。このインタビューは、行政組織が社会包摂デザインに取り組むためのポイントなどをリサーチするものでした。その中で、行政の仕組みや制度、組織の力学、職員個人の意識などの様々なレイヤーで、取り組む際の難しさや、取り組むために必要な要件や工夫が述べられていました。例えば、行政内部や議会への説明や説得の仕方、縦割りではなく横串での重層的支援体制、取り組みの入り口としての業務の定型化など、重要な気づきを与えてくれています。

包摂的な社会を目指すためのモノ・コト・場のデザインの実践が広がり、社会実装をするためには、行政も含め、民間企業、NPO、市民団体など、様々な組織自体が変化することが必要です。もちろんそれは、取り組みがすぐに手応えのある変化があるわけではなく、小さな取り組みを積み重ねながら諦めずに継続することで、個々人が変わり、個人と個人の関係が変わり、組織が変わっていくのではないのでしょうか。

私の田んぼや畑が多様な生物が関わり合う場になるためには、まだまだ時間がかかることでしょう。それと同じく、DIDIが目指す包摂型社会の実現という壮大な目的に向けて、長い長い歩みをいま始めたばかりです。



大澤 寅雄 おおさわとらお

合同会社文化コモンズ研究所代表。NPO法人アートNPOリンク理事長、日本文化政策学会理事。共著に『これからのアートマネジメント“ソーシャル・シェア”への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと』『文化政策の現在3文化政策の展望』『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』。

2023年～2024年 メディア掲載・情報発信

[新聞]

2023年3月27日
西日本新聞

朝刊、1面

ピクトグラムに残る偏見？

トイレ案内の表現、模索続く 識者「時代に合った表現を」
トイレのピクトグラムを通して「わかりやすさと性の固定観念」
について考える特集記事で、伊原久裕教授、尾方義人教授のコメントと、九州大学芸術工学部の教員や学生が試作したジェンダーニュートラルのピクトグラムが紹介されました。



[ラジオ]

2023年4月3日、10日、17日、24日
LOVE FM「スイッチオン! DAYTIME」

12:30～(各8分程)

出演：4/3長津、4/10田中、4/17須長、4/24工藤

Goodness☆Business

DIDI教員4名(長津結一郎、田中瑛、須長正治、工藤真生)が
週替わりで出演。月曜担当DJ藤田じゅんと対談形式で、そ
れぞれの研究分野やプロジェクトについて話しました。

[新聞]

2023年6月25日、26日、27日、7月3日
共同通信

地方紙15紙：6/25秋田魁新報・下野新聞・四国新聞・愛媛新聞・岩手
新聞・熊本日日新聞、6/26山形新聞・埼玉新聞・新潟日報、6/27千葉日報・
信濃毎日新聞(夕刊)・中国新聞・河北新報・長崎新聞、7/3神戸新聞

ジェンダーとピクトグラム

トイレの壁の色やピクトグラムを見直す動きについて考える特
集記事で、伊原久裕教授のコメントや九州大学の学生らが制作
したピクトグラムが紹介されました。

[テレビ]

2023年7月7日
FBS「めんたいワイド」

15:48～19:00

水泳・世界選手権の競技会場公開

性別を感じさせない「ピクトグラム」を九大生が制作

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会の会場について報
道するニュース内にて、「当大会のために制作されたピクトグラ
ムには、性別に基づいた固定観念をなくしようという思いが込め
られている」という内容が紹介され、伊原久裕教授、九州大学
の学生らが出演してコメントしました。

[新聞]

2023年7月21日
読売新聞

夕刊

世界水泳のピクトグラム、多様性に配慮

…九州大生ら「人の形は中性的に」など工夫凝らす

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会の会場が使われた
ピクトグラムに関する記事で、デザイン制作のプロ
セスなどについて伊原久裕教授、九州大学の学生ら
のコメントが紹介されました。



[新聞]

2023年9月11日
毎日新聞

夕刊

そのピクトグラム、性別の思い込みない？

大学生が制作・提起

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会の会場に使われた
ピクトグラムに関する記事で、工藤真生助教、九州大学の学生
らがジェンダーバイアスの見直し、また、障害のある
人や子どもにとっての分かりやすさなどを考慮し
てピクトグラム作りを行っていることが紹介されま
した。



[新聞]

2023年11月10日
西日本新聞

朝刊、18面ふくおか都市圏

ジェンダーをテーマにフォトコンテスト

九州大工学部の山田さんに最優秀賞

福岡市南区のアミカス

第3回「写真とことば ジェンダーデザイン・コンテ
スト」に関する記事で、最優秀賞の九州大学学生が

作品の意図を語ったコメントが紹介されました。



[新聞]

2023年12月6日
西日本新聞

朝刊、10面文化欄

『Walk on the Outside? 障害×表現は特別ですか?』

異なる視点から見える風景

連載シリーズ『Walk on the Outside? 障害×表現は特別で
すか?』の第3回で、障害を有する人との映画制作プロジェク
ト(p.18参照)の活動の様子が詳しく紹介されました。

西日本新聞社の許諾を得て記事画像をDIDIウェブサイ
トに掲載しています。右のコードから閲覧できます



[新聞]

2024年1月1日
信濃毎日新聞

朝刊、23面くらし欄

ライフスタイル ジェンダーを超えて(上)

性を中立に 県内高校生模索

トイレのピクトグラムをデザイン

長野県の複数の高校で、美術部員などの生徒が校内のトイレの
ピクトグラムを自らデザインし実装する試みについての特集記
事にて、伊原久裕教授のコメントが紹介されました。

信濃毎日新聞社の許諾を得て記事画像をDIDIウェブサイ
トに掲載しています。右のコードから閲覧できます
(転載期間2024年1月16日～2025年1月15日)



[新聞]

2024年2月15日
西日本新聞

朝刊、21面ふくおか

半農半アート実践者が活動報告

九大高橋キャンパスでフォーラム

2月10日開催のフォーラム(p.22参照)について紹
介されました。



[論文掲載]

2024年3月31日
日本デザイン学会 デザイン学研究作品集 29巻

社会包摂のためのピクトグラムとサイン

— FINA世界水泳2023大会を事例として —

第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会での会場ピクトグ
ラムとサインのデザインプロセスを事例とし、ジェンダーや障
害などの社会包摂のためのデザイン方法を提案・考察した共著
論文が掲載されました。

著者：工藤真生(筆頭著者、DIDI教員)、伊原久裕・須長正治・尾方義人
(DIDI教員)、久米聖伍・疋田睦(元九州大学大学院芸術工学府)、

鈴木千畝・金子千聖・
星野純平(九州大学大学院
芸術工学府) ※敬称略



論文で示した図版の一部

[論文掲載]

2024年3月31日
日本デザイン学会 デザイン学研究 研究論文集70巻
第4号

差別語の歴史の変遷の可視化と分析

— 『記者ハンドブック』を分析対象として

共同通信社が出版する『記者ハンドブック』を分析対象として
差別語の変遷を可視化し、分析を行った応夢さん(筆頭著者、
九州大学大学院芸術工学府博士課程)、田中瑛助教、尾方義人
教授の共著論文が掲載されました。



論文で示した図版の一部

学内発表

[オンラインセミナー]

九州大学アジア・オセアニア研究教育機構 Brown Bag Seminar

「Brown Bag Seminar」は九州大学アジア・オセアニア研究教育機構が毎週水曜日のランチタイム(12:10～12:50)
に開催しているオンラインセミナーです。本学のアジア・オセアニア地域やSDGsに関連する最新の研究活動を多く
の方に知ってもらい、異分野研究ネットワークや交流やきっかけの場を提供するもので、どなたでも気軽に参加いた
だける内容となっています。これまでにDIDI教員4名が発表し、前年度以前のものも含めアーカイブ動画が公開さ
れています。

2022年3月23日 [第43回]

アートと共生社会

— 心のいのちを養い、分断をつなぐ —

知足美加子先生が、心のレジリエンスを回
復するためのアートの実践と知見を紹介す
る発表を行いました。



2022年7月13日 [第57回]

「支援する/される」からの脱却—障害・認知症ケ

アの場における共創的アート活動の可能性—

中村美亜先生が「共創的アート活動」の事例を紹介し
ながら、障害や認知症の有無に関わらず豊
かな関係性を築く可能性、それを社会に広
げていく可能性について考える発表を行いま
した。



2023年5月17日 [第95回]

総合知とデザイン

— 未来を妄想し、勝手に表現する

尾方義人先生が、楽しい未来を考えるためのデザイン
からの投げかけとして、「ダイレクト・エア・キャプチャー
技術が工業化され、社会に浸透していくとどうなるか。
あるいは社会と技術の関係を考えるにはど
うすればいいかを、表現する」というテー
マで発表しました。



2023年11月29日 [第122回]

障害からはじまるアート/ケアの場の創造

長津結一郎先生が、聴覚障害のある人と「音楽」
について探究するプロジェクトの事例を通して、障
害のある人と芸術との関わりから見えてくる新たな
社会の在り方について考える発表を行いました。



[学内研究会]

数理モデルデザイン研究会

2024年2月6日 [第6回] 16:40～18:10

「育児のしやすい職場環境に向けた課題の析出——芸工内外の調査結果を踏まえて」

田中瑛先生が、芸術工学部内外の育児経験者を対象に調査を実施し、どのような職場環境
の変革が求められるのかを析出した結果(p.14参照)を踏まえて、ライフ・ワーク・バラ
ンスの再設計に向けた課題を提示する発表を行いました。発表後は、数理、哲学、デザイ
ンなどを専門とする教員らと、様々な角度からの視点を交えて議論を行いました。



田中先生による発表の様子

総括

社会包摂デザインとユニバーサルデザイン

中村 美亜 (副センター長・DIDI 教員)

「社会包摂デザイン」と聞いて、「ユニバーサルデザイン」を思い浮かべる人は少なくないようです。たしかにユニバーサルデザインは多様な人々を包摂しようという意図で生み出されたデザインです。しかし、私たちが「社会包摂デザイン」という言葉を使って表そうとしたものは、それとは少し違うように思います。では、何がどう違うのか？—私たちが社会包摂デザイン・イニシアティブを立ち上げた頃には、この問いにうまく答えることができませんでした。しかし、今なら答えることができるように思います。

ユニバーサルデザインは、年齢、性別、文化の違いや、障害の有無などにかかわらず、できるだけ多くの人々が利用できるようにデザインすることを指します。つまり、マジョリティを対象にしてきたデザインに変更を加えて、これまで取りこぼされていた人にも利用しやすいものにしていきます。一方で、社会包摂デザインは、まずこれまでデザインの対象になっていなかった人の視点から何が必要か、どうデザインすると良いかを考え、その上でそれをどうすればより多くの人にも対象を広げていけるかを検討します。つまり、マジョリティから出発してマイノリティを包摂しようというのではなく、マイノリティから出発してマジョリティを包摂しようとする方向性です。(この点で、社会包摂デザインは澤田智洋氏が標榜する「マイノリティデザイン」に近いアプローチとすることができます。)

昨年度実施した「社会包摂デザインのプロセスを体験するロールプレイ型ワークショップ」は、まさにそうした社会包摂デザインのモデルを提示する場でした (p.6 および『DIDI2022 年度活動報告書』p.10-11 参照)。田北雅裕先生のカードキット「TOKETA」の事例では、当初「パンフレットを作る」というマジョリティが考えるマイノリティのニーズに応える方向に進みかけていましたが、そう進むのを踏みとどまり、マイノリティのニーズを探るところから始めることにしました。その結果、里子のニーズに合致するのはもちろん、里親側、特に里親の子どもにも有用なカードキットができました。また、羽野暁先生のキャンパス案内図の事例では、まず二色覚の人向けに配色し、それを三色覚の人にも満足いく形を探るという順でデザインが進んでいきました。ほかにも、世界水泳のピクトグラムや聴覚障害のある人にとっての音楽、認知症の人との演劇ワークショップなど、社会包摂デザイン・イニシアティブの研究プロジェクトの多く

で、同様のアプローチが見られました。

もう一つ付け加えるなら、社会包摂デザインは、ユニバーサルデザインのように「みんなのためのデザイン」という普遍性を目指しません。あるコミュニティで最適な社会包摂デザインは、ほかのコミュニティではうまく機能しないこともあるでしょう。しかし、それで良いのだと思います。大切なのは、どこへ行っても同じものがあるというのではなく、様々な選択肢があり、それを選ぶことができるという状況です。言い換えるなら、どこへ行っても排除される人たちが同じなのではなく、行くところによって排除される人たちが異なるという状況ということです。もしそれぞれの人が複数のコミュニティに属し、コミュニティどうしが緩やかに繋がっていけば、結果的に「多様な人々が包摂される社会」が現れてきます。

ちなみに「インクルーシブデザイン」は、マイノリティが利用するものを、マイノリティ自身がデザインプロセスに参画することで、よりニーズに適したものにするというアプローチです。もちろん、実際には3つにきっちり分類することは難しいのですが、それぞれのアプローチの特徴を対照的に説明するとすれば、このように考えることができるのではないのでしょうか。

本稿の執筆直前に、芸術工学部局 (学部、大学院、教員組織) の「ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン (DE & I) 推進室要項」が制定され、DE & I 室が設置されることになりました。これは本部局における男女共同参画、障害者、LGBTQ、多文化共生などの DE & I に関する課題を調査審議し、DE & I を推進させることを目的としています。学生や教職員からの相談や要望を受け付け、審議結果をすぐに部局の執行部会議に報告できるように、またインターナショナルオフィスや事務部の学務課・総務課と連携することで、各現場での対応にもすぐに対応できるように工夫されています。もちろん、社会包摂デザイン・イニシアティブとの連携も期待されています。

社会包摂デザイン・イニシアティブは、今年度で文部科学省の概算要求予算期間が終了し、次年度から新たな形態で運営されることとなります。規模は縮小されることとなりますが、DE & I 室とも連携しながら、社会包摂を推進するハブとして機能し続けていく予定です。

社会包摂デザイン・イニシアティブ (DIDI) 2023 年度メンバー

DIDI は3つのラボから構成されています。ただし、プロジェクトを遂行する際には、ラボの枠を超えてタスクフォースを組み、また、学内外の協力教員とも連携します。

デザインシンクタンク

センター長 *シビックデザインラボと兼任

尾方 義人 (教授・インダストリアルデザイン、デザイン学)

副センター長 *ソーシャルアートラボと兼任

中村 美亜 (教授・芸術社会学)

羽野 暁 (特任准教授 [キャンパスライフ・健康支援センター]・公共空間デザイン、ランドスケープデザイン、空間と社会包摂)

田北 雅裕 (講師 [人間環境学研究院]・まちづくり、コミュニケーションデザイン、教育デザイン論)

田中 瑛 (助教・社会学、メディア・ジャーナリズム研究)

白水 祐樹 (テクニカルスタッフ)

ソーシャルアートラボ

ラボ長

長津 結一郎 (准教授・アートマネジメント)

朝廣 和夫 (教授・緑地保全学)

尾本 章 (教授・応用音響工学)

知足 美加子 (教授・彫刻)

中村 美亜 (教授・芸術社会学)

森 千鶴子 (学術研究員・社会教育学)

眞崎 一美 (テクニカルスタッフ)

シビックデザインラボ

ラボ長

朝廣 和夫 (教授・緑地保全学)

伊原 久裕 (教授・グラフィックデザイン)

尾方 義人 (教授・インダストリアルデザイン、デザイン学)

工藤 真生 (助教・サイン計画、視覚記号)

須長 正治 (教授・色彩・視覚科学)

田上 健一 (教授・構築環境デザイン)

村上 泰樹 (助教・聴覚情報処理)

村木 里志 (教授・福祉人間工学、身体運動科学)

アドバイザー (協力研究員)

大澤 寅雄 (合同会社文化コモンズ研究所代表)

耘野 康臣 (NPO 法人九州コミュニティ研究所代表)

宮田 智史 (NPO 法人ドネルモ事務局長)

谷 正和 (九州大学大学院芸術工学研究院客員教授)

運営室

白水 祐樹 (運営室長)

田中 瑛 (学術研究担当)

小黒 伽菜 (事務・会計担当)

社会包摂とデザイン - 問いの立て方、答え方 -

九州大学社会包摂デザイン・イニシアティブ 2023 年度活動報告書

2024 年 3 月 31 日 発行

編集 白水 祐樹、田中 瑛、木下 貴子 (CXB)

執筆 朝廣 和夫、伊原 久裕、耘野 康臣、大澤 寅雄、尾方 義人、工藤 真生、白水 祐樹、田中 瑛、田上 健一、知足 美加子、長津 結一郎、中村 美亜、眞崎 一美、宮田 智史、村木 里志、森 千鶴子 (50 音順)

デザイン 大村 政之 (図案考案クルール)

令和 5 年度運営費交付金 機能強化経費 (機能強化促進分) (取組) により運営。

事業名: 多様性のある包摂型社会の「しくみ」をデザインする先導的研究拠点の整備

発行 九州大学社会包摂デザイン・イニシアティブ
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原 4-9-1 社会包摂デザイン・イニシアティブ事務局
Tel&Fax: 092-553-4552 E-mail: didi-office@design.kyushu-u.ac.jp
URL: https://www.didi.design.kyushu-u.ac.jp

©2024 九州大学社会包摂デザイン・イニシアティブ



Design Initiative for
Diversity & Inclusion
社会包摂デザイン・イニシアティブ

九州大学



大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

Faculty of Design
Graduate School of Design
School of Design
Kyushu University